同じ様なテーマ（シナリオ？）を元にした勝負です。読者の皆さん！　どの「常雄右腕」が面

シー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バトル３回目！　小説を比較勝負します！！　同じ様なテーマ（シナリオ？）を元にした勝負です。読者の皆さん！　どの「常雄右腕」が面白かったかを投票してクレオｍ（＿＿）ｍ

【Ｎコード】
Ｎ５７９３Ｊ

【作者名】
シー

【あらすじ】
「常雄右腕」という作品は、実は同じ作品が５つあります。
一つはクレオという馬鹿チンが書いた常雄右腕。
その他４つは僕、シー様が「真面目書いた常雄右腕」と「フザケテ書いたコメディー版常雄右腕」と「市販小説っぽく書いた常雄右腕」と「絶対に皆が小説とは認めないだろう小説」と書いてあります。

５つともシナリオは同じなのですが文章の展開の仕方が全く異なります。

そして今回、僕は勝手な都合でクレオに戦いを挑みました。
読者に僕の作品と、クレオの作品を読み比べて貰って、どちらが面白かったかを投票してもらいたいと思います。

シー様のフザケタ「常雄右腕」

今ココに、弁護士（男）と、とある女が居る。
２人は、現在、密着し合っているのだが、それは、女が弁護士を包丁で刺しているからである。
「アタシと一緒に死んで・・・」
女はそう告げ、男は成すがまま、その場に倒れるのである。
倒れた男は、小さな声で「なんでや～」と言う。
女は、刺した包丁を抜き。それから自殺を図ろうとしていた。
「これで全部終わらす・・・」
涙を流し絶望した表情をかもし出した女は、急に青ざめた。
「あああああああ」
奇声に似た悲鳴であるが、この時、女は大きな過ちを犯した事に気づいたのである。
それは・・・

刺す人を間違えたのである。

☆

～ベットの上にて～

「痛い！」
という感覚で目を覚ました男。

男は周囲を見渡し、ここが病院である事を悟る。

自分に何が起きたのかか・・・
考える余地もなく直ぐに理解した。
男のわき腹に激痛が走るのである。
男は思い出した。何もかもを・・・
と、そこへ男を刺したであろう、あの女がやってきた。

「ごめんなさい。間違って刺してしまいましたm（＿＿）m」
「ごめんなさいだと？　そんなんじゃ俺様の気はおさまらねえ！
やらせろ！」
と、言わんばかりの表情で、男は女に詰め寄った。

しかし、だからといって、男は女に詰め寄れない。
男は、全治６週間のケガなのでベットから這い上がる事等できないからだ。

女は、安全な位置から謝罪をしている。
男は、この女が安全な場所から動こうとしない事に誠意の無さを感じたのか、それともただ、怒り狂ってるだけなのか、とにもかくにも高額な慰謝料の請求をし始めたのである。

「こら！　てめえ！　俺は弁護士様だぞ！　偉いんだぞ！　これから凄い裁判を控えていたのに、よくもこんな体にしてくれたな、このメスブタが！！　慰謝料払えないのなら、体で払ってもらうぞ！！」

被害妄想を用いて傍から見るとこんな感じなのかもしれないが、

それは読者の主観が入るので真実は判らない。

ともかく、この男の、あまりの剣幕ぶりに、病院の医者、看護婦も一同圧倒されて萎縮してしまった。

女も同様に萎縮してしまって、つい、男の詐欺とも言える高額な慰謝料請求に応じてしまったのであった。

☆

日々が経過したある日、男は、何事も無い様に日々を過ごしていた。

そりゃそうです。　男にとっては、数ある一つの仕事を失っただけなのですから、時が解決してくれるというものです。

そんな日々の中で、流石に、か弱い女から不当利得を得てしまっている事に罪悪を感じている自分に気付いたのでしょうか・・・

男は、あまりの高額な慰謝料を支払い続ける女が、本当に、売りでもやって金を稼いでいるのではないかという疑問を持ってしまいました。

そして案の定、その予測は当たってしまいました。

女は、風俗店で働いていたのでした。

「あちゃーーーーー！！」という安易なリアクションをこの男が取ったかどうかは判りません。

ただ、文章上、この安易な流れにした方が面白いという読者意見がありそうなのでこうしました。

実際は、もしかしたら、シリアスに男は、罪の意識を感じていたかもしれません。

きっとそうです。

だからこそ、男は、彼女の事を気に掛けて、ストーカーの様に身

辺調査をしたのです。　その過程で、彼女が勤めている風俗店が、実は違法な闇風俗店という事が判ってしまいました。

闇風俗店＝暴力団＝レイプ強姦監禁暴力

と、男の思考は、爆発してしまったのでしょうか？

それとも愛しき彼女を助け出す為か？、いずれにせよ、男は彼女の為になる行動を起こしました。

が・・・

時既に遅し・・・

女は、暴力団にさらわれていたのです。

男は絶望しました。

何に絶望したのか判りません。

女とヤレル機会を失ったからか？　それとも女とヤレル機会を失ってしまったからか？

すみません。いま、同じ文章が2回続きましたねw

つい、作者の感情が入ってしまった様で、今度から気を付けたいと思いますm（＿＿）m

とまあ、そんなこんなで男は頑張り続けましたとさ、、めでたしめでたし・・・

～後書き～

実は、彼女が主人公を間違えて刺してしまった原因は、自分の恋人と顔がソックリであったからです。

安易な展開でゴメンなさい。

あくまで、この作品は、真面目な作品「常雄右腕」のシナリオを

元にしたオフザケ作品に過ぎません。
　ですので、土台となってる「常雄右腕」をご存知方には、イメージをぶち壊す結果に成ったと思うので、この場を借りて深く謝罪しておきますm（＿＿）m

シー様の真面目な「常雄右腕」

女は憎悪を満ちた表情で歩いている・・・その手に包丁を持って・・・

女の歩く向かう先には男。
男は、女の鬼の様な形相に、一瞬ビックリするが、それも束の間――

ブスリ！

男のわき腹を刃が突き刺さるのだった――

男が気付いた時には病院のベットの上に居た。

男は自分に何が起きたのか思考を巡らしたが判らない。
女に刺されたことは判るのである。
それで入院するハメになったという事も判る。
だが、なぜ、女に刺されなければならなかったのか全く理解できないのだ。

と、そこへ、自分を刺したであろう女がやってきた。
男は反射的にビクつくが、どうやらその必要は無いらしい。
女は見舞いの品を男に渡し、深々と頭を下げるのであった。

どうやら女は、人違いをして刺してまったらしい。

男は、あっけに取られながら、女の謝罪を聞いている。
だが、男は急に、そんな事等どうでも良いという感じで慌てふためき始めた。

「どうしてくれるんだ！　大事な裁判をぶち壊しやがって！」

実はこの男、弁護士である。
しかも有能な弁護士であり、現在、重要な裁判をしている真っ最中であるのだ。
男は、ケガをしてしまった事で裁判に出られなくなり仕事を失ってしまう事に対して、慌ててしたのである。
そして、いざ、ケガでどうにもならない事を悟った男は、怒りを女にブツケルのであった・・・

「どう責任をとるつもりだ！」

女は、そのあまりの高圧的な態度に恐れおののくも自分に非がある事を認め責任を取ろうとしました。
ですが、それでも男の怒りは収まる事等無く、男は持ち前の弁論で捲くし立て、女に法外な慰謝料を請求しました。

それから数ヵ月後・・・

男は何事もなく日々を過ごしていました。
男にとっては、所詮は数ある内の一つの仕事失ったに過ぎなかった。
日々の多様な仕事に追われている内に、気付けば、あの重要な裁

判の仕事も忘れる様なっていて、踏ん切りがついていたのでした。
男は冷静さを取り戻したのか、余裕ができたのか、あの女の事を考えていた――ー

☆

～公園のベンチにて～

「いいんですか！？　本当に、もう慰謝料を払わなくて？」

男は、法外な慰謝料を女に請求したことに罪悪感を感じていたからか、
それとも仕事人としてのプライドからか、いずれにせよ男は、今までに余計に支払らわれた代金を返却した。
そして男は、ある疑問を尋ねようとした――――

――――だが、男が尋ねるのも束の間、
女は「では、これで失礼します」と、男の声を遮る様に、あいさつをして駆けていくのでした。

「あ！　ちょっと待って！」
男の声は、女に届いていないのか。
女は、振り返る事無く走って行きました。

☆

～風俗店にて～

男は、風俗店の受付に居た。
なぜ、男が、ここに居るのかと言うと、先ほど公園で女が忘れ物（ハンドバック）をしていたからだ。
男は、女に忘れ物を届ける為に女の後を追いかけたのだ。
そして男は風俗店に辿りついた。

男は、女が忘れ物をする程焦っていた理由が判ったと同時に当初、女に対して抱いていた疑問が晴れた。
その疑問は、慰謝料という高額な代金をどうやって女は捻出していたかという事であった。
その捻出方法を理解した時、男は、どうしょうもない罪悪間に捕らわれた。
男は自分が女を風俗に通わせてしまう程に追い込んでしまったと思うのであった。

すまない。という表情を浮かべ、男は店を後にするのだが、そこで男は背筋に嫌な感覚が走ったのである。
直感とも言うべき感覚だろうか、男は、その嫌な感覚を取り去る事ができないまま日々のを過ごしていた。
そしてある日、思い出した様に法務局へと足を運んだ・・・

男の嫌な予感は的中していた。
あの女の勤めていた店は、いわゆる闇風俗店であり、届出等していなかったのだ。

男は思い出して想像してしまう―――

自分が、弁護士バッジを付けまま闇風俗店に入ってしまった事を―――

そして、もし、闇風俗店が裏で暴力団と繋がっていたら――――

そして、もし、私が違法風俗店を摘発する為の証人として、彼女を利用していたと、奴らに勘違いされていたら――――

彼女の身に危険が及ぶ！

☆

案の定、男の予感は的中してしまった。

店は、まるで神隠しにあったかの様に、誰もいなくなっていた。

そして女は行方意不明となっていたのだ。

男は念のために彼女の住んで居たアパートを尋ねた。だが、彼女が家に帰ってきた形跡は無い。何度も足を運ぶが、やはり彼女は帰らない。

私は彼女の親御さんの連絡先も調べてみたが彼女に家族は居なかった。

だれからも、捜索願も出されない。
だれからも、助けるられることは無い。

男は、この時、初めて闇の世界の卑劣さを知った。
最初から誰にも心配される事のない人を利用すれば、何をしても足が付く事がないのである。
仮に彼女を証拠隠滅の為に殺したとしても、誰も彼女を気にかける者などい等いないのである。これが奴らの手口である。

☆

男は警察に捜索願を出したものの捜査が進展する気配は全く無かった。
男は後悔していた。
全てはあの日、自分が我を失って、自暴自棄になっていたから・・・
全ては、それが原因で、彼女を追い込んでしまったからだ・・・
全ては自分の責任だ・・

男は、自分を責める理由をあれこれと探している内に、自分への憎悪がこみ上げてきた。
そしてその憎悪の矛先は、最終的に暴力団組織へと向けられた。
全ての原因は、そこあるといわんばかりに常雄は行動を起こすのであった。

☆

男はまず、弁護士のネットワークを使い、過去の暴力団関係の案

件を徹底的に調べた。　男の気持ちが通じたのか、警察関係者に、つながりのある弁護士が協力してくれた・

調べていくと、
奴ら違法風俗店は訴訟の警告を受ける段階で逃げている事がわかった。
偽名を使いヤバクなった逃げる。別の土地で、また偽名を使い風俗店を経営する。
同じような手口で、全国を転々と移動していた。。

だが、奴らの正体、居場所などは特定できなかった。
別の暴力団達も同じような手口で違法風俗店を経営していて、それが無数に存在するのだ。どの風俗店が、どの暴力団と繋がりがあるのか、全くわからなかった。

弁護士仲間の話によると、日本中のあらゆる土地で、これと同じ犯罪が繰り返されているのだそうだ。、
警察も犯人を捕まえても捕まえても、違法風俗店の数が減らない事に嫌毛がさしているのだそうだ。、

私は、腹が立った。
奴らや組織もそうだが、全ての人間にも……
そこに通う客、そこに違法風俗店があるのに、周りの人間が気づかない無頓着さ。

だが、それは、自分に対しての言い訳だった。
元はと言えば、私が彼女を追い込んだ様なものなのだ。
男は、自分自身の無頓着さに腹を立てていた。

、
せめて、彼女から、連絡さえあれば、助けられる希望はあった。
だが男の携帯が鳴ることは、一度も無かった……
・
・
・
気が付くと、私の生き方は変わっていた。
企業相手の金儲けの主義の様な依頼は断るようになり、、
暴力団相手の訴訟に勤めていた。。

☆

私は、やれるだけの方法を使い、片っ端から暴力団の摘発に人力を注いだ。
そうしていれば、いつか彼女の手がかり得られると思ったのだろう。
まるで愛しき人を助けるかの如く、男は、その仕事に力を注いだのであった・・・
そしてその過程で、ついに彼女へと繋がる手がかりを見つけた。

～刑務所の中で、あると囚人と2人きり～

囚人は、暴行、窃盗、覚せい剤、等、あらゆる犯罪を犯していた。
私は今回、この暴力団関係者の囚人から情報を聞き出そうとしてたのだが、相手にされない。
囚人は、ただ、のらりくらりと、話題を摩り替えるだけであり、一向に目的とした情報は得られなかった。

囚人は、暴力団とは全く関係の無い思い出話に花を咲かせて酔っていた。
「俺は、結構、モテてたんだぜ～～！」
囚人は、麻薬の禁断症状があるのか、視線が定まっていない。
言葉選びも論理的な思考をしていなく、ブツブツ独り事を喋っている様な感じである。
だが、囚人の発したある言葉に、私は硬直したのである。
その言葉の中に、失踪した彼女を連想させるワードがいくつも入っていたのだ。
そして確信を持ったのは、この囚人の顔だった。
丸刈りで、一見すると、判らなかったが、わたしの顔にソックリであったのだ。

彼女が私を恋人と勘違いして刺してしまった事実・・・
そして、囚人が発するこの言葉・・・
それらを考慮すると、この囚人が、彼女の恋人であったのは明らかだった。

「あの女は、俺にぞっこんだったから、いいなりだった。
紹介した風俗店で俺の為にしっかりと稼いでくれた。
いいヒモだったんだが、一体どこに逃げたんだろうな。
惜しい事をしたなーーーー」

彼女の苦しみが、私に流れ込んできた。
彼女は、最後まで、この腐りきった男を愛そうとしていた。。
無理やり働かされ、追い詰められ、心中まで図ろうとした。

殴ってやりたい。殺してやりたい。
けど奴は、壁の向こう……

私は怒りをこらえるのに必死だった。

その日から、私は、自分の顔が嫌いになった。
鏡で自分の顔を見ると、激しい憎悪にとりつかれ、気が変になりそうだった。

そんな時、テレビで、ある小説家を見た。
その小説家は、バレエティー番組で話をしていた。
その話の内容に私は共感した。
彼は、私と同じ信念の持ち主であり、私以上に強い信念を持っていた。
私は、彼の虜になり、この忌まわしい自分の顔を整形して彼とソックリに作り変えた

それからの私は、今以上に仕事を懸命にやった。
いつか、彼女が助かる日を信じて……

そして……

お前達、覚えておけ……

私の名は……

「常雄右腕」

暴力団組織を潰す者である――

クレオの「常雄右腕」

私は常雄右腕。
弁護士だ。
私は、いつものように依頼人の弁護に駈けずり回る日々を送っていた。
そんなある日、私は、いきなり刺された。
刺したのは女だった。
私は、訳がわからなかった。
この女は誰なのだろうか？
薄れいく意識の中で、聞こえた言葉は、、
「私と一緒に死んで……」
気が付くと私は、病院のベットの上にいた。
横には、さっきの女がいた。
女は、私に必死で謝っていた。
彼女の説明では、自分を裏切った彼氏と間違えて刺してしまったのだそうだ。
間違えた理由は、その彼氏と私の顔がソックリだったからだそうだ。。
私は、困った。困惑した。
その中で、一番の問題となるのは、仕事だった。
傷は幸いにも浅く、しばらく入院すれば助かるそうだ。、

けれど、私は、急ぎの仕事を沢山抱えていた。

私は、小さな弁護士事務所を仲間と経営していた。
仲間は、経理担当や雑務ならこなせるが、私の代役にはなりえない。
このままでは、事務所の信用がガタ落ちになってしまう。

普通、弁護士は、同業者とある程度のネットワークを持っていて、自分に何か起きたときの為に、代役を作っているものである。
私も代役が居るから、頼むことになるのだが、とても悔しい。

事務所が失望されて、普通の仕事が奪われるなら、私も許せる。
けど、今回の仕事は普通の仕事などではない。
私たち事務所の未来が掛かっている。

この案件は、企業の権利訴訟に関するもので、莫大な資金が動いている。。
1回の弁護報酬も千万単位で動くのだ。
こんな稀な案件、小規模事務所に転がり込んで来るなど、もう永遠にないかもしれない。
この案件を勝ち取れば、私たちの事務所は、企業権利分野で一気に有名になれたかもしれない。
このチャンスだけは、失いたくなかった。

私は、一年も掛けて、裁判を闘う準備をしていた。
あきらめる事など出来るはずがなかった。

私は、彼女を責めた……

だが、彼女に、責任は取れるはずもないし、法律上責任もない。。

彼女は、私がこんな重大な案件を抱えているなんて知るよしも無いからだ。
一般的な人が受けるであろう、損害を彼女は負担すれば良いだけだった。

彼女は、何とかして、罪を償おうとした。
思えば、彼女も辛い思いをして、こんな事件を起こしてしまった。
、
彼女のひたむきな姿勢を見ることで、許したい気持ちになっていたのかもしれない。

時は経ち、冷静になってきた私は、あの重大な案件に踏ん切りがつき始めていた。

彼女は、変わらず、私の銀行口座に、慰謝料を振り込んでくれている。。
だが、その額は、一般的な人が受けるであろう慰謝料を遥かに超えた金額だ。
慰謝料の契約時、彼女は私の意志を尊重してくれて、譲歩してくれたのだ。

だが、私は、疑問に思った。
普通の人が払い続けられるような金額では無かったからだ。

私は、事件直後は、我を失って興奮状態であった。
だから、余裕がなく、彼女のことは、あまり知ろうとはしなかった。
彼女は、一体、どこから、お金を捻出しているのだろうか。

私は、彼女の事が気になった。

間違った慰謝料を返す為も含めて、彼女に会うことにした。
彼女に連絡を取り付け、カフェで待ち合わせることになった。
彼女は、躊躇していたが、喜んで私の金を受け取ってくれた。
私は、彼女の仕事について聞いてみたが、教えてはくれず、そそくさと、帰ってしまった。

気が付くと彼女は、自分のハンドバックを忘れて帰っていた。。
私は、走って届けにいった。
追いかけた先で、彼女は風俗店に入っていった。

私は、足が止まった。
私の金を返すために、ここで働きだしたのだとしたら……
私は罪悪感を感じた。
彼女は、私に、知られたくなかったのだろう。
でも、もう働く必要など無い。

私は、風俗店の係りの人に、忘れ物を届けて帰ろうとした。
だけど、嫌な感覚があった。
言葉では説明できない嫌な感覚……

私は、この店の届出を調べた。
無許可営業だった。
私は、気になって、彼女に連絡をした。だが、繋がらなかった。。

私は、嫌な想像をした。
私が弁護士であることは、係員に彼女の忘れ物を渡した時、弁護士バッチでばれた気がする。
だとしたら、闇の風俗店は、もみ消そうとするだろう。

彼女に連絡が付かないのは、彼女に危険が及んでいる可能性があることになる。

私は、その風俗店に行てみたが、時既に遅かった。
店には誰も人は居なくて、彼女の住まいは引き払われていた。
彼女は、消息不明となっていたのだ。

私は、念の為、彼女の親御さんの連絡先を調べて見たが、彼女に家族は居なかった。

だれからも、捜索願も出されない。
だれからも、助けるられることは無い。

私は、この時、初めて闇の世界の卑劣さを知った。
「私が助ける」
「奴らは、私がぶっ潰す」

私はまず、弁護士のネットワークを使い。
過去の暴力団関係の案件を徹底的に調べた。
私の気持ちが通じたのか、警察関係者に、つながりのある弁護士が協力してくれた・

調べていくと、
奴ら違法風俗店は訴訟の警告を受ける段階で逃げている事がわかった。
偽名を使いヤバクなった逃げる。別の土地で、また偽名を使い風俗店を経営する。
同じような手口で、全国を転々と移動していた。。

だが、奴らの正体、居場所などは特定できなかった。
別の暴力団達も同じような手口で違法風俗店を経営していて、それが無数に存在するのだ。どの風俗店が、どの暴力団と繋がりがあるのか、全くわからなかった。

弁護士仲間の話によると、
日本中のあらゆる土地で、これと同じ犯罪が繰り返されているのだそうだ。、
警察も犯人を捕まえても捕まえても、違法風俗店の数が減らない事に嫌毛がさしているのだそうだ。、

私は、腹が立った。。。
奴らや組織もそうだが、全ての人間にも……
そこに通う客、そこに違法風俗店があるのに、周りの人間が気づかない無頓着さ。

だが、それは、自分に対しての言い訳だった。
元はと言えば、私が彼女を追い込んだ様なものなのだ。
私は、自分自身の無頓着さに腹を立てていた。
、
せめて、彼女から、連絡さえあれば、助けられる希望はあった。
だが私の携帯が鳴ることは、一度も無かった……
・
・
気が付くと、私の生き方は変わったいた。
企業相手の金儲けの主義の様な依頼は断るようになり、、
暴力団相手の訴訟に勤めていた。。

私は、日々、暴力団の証拠の調査をしているうちに、刑務所にいる一人の囚人に、ある話を聞いた。
その囚人は、私の調査などに簡単に応じてはくれずに、ふざけていた。

囚人は、昔の女の話をぺらぺらと、話していた。
その話の中に、失踪した彼女を連想させるワードがいくつも入っていたのだ。
確信を持ったのは、この囚人の顔だった。
丸刈りで、一見すると、判らなかったが、わたしの顔にソックリであったのだ。

囚人は話を続けた。
「あの女は、俺にぞっこんだったから、いいなりだった。
紹介した風俗店で俺の為にしっかりと稼いでくれた。
いいヒモだったんだが、一体どこに逃げたんだろうな。
惜しい事をしたなーーーー」

彼女の苦しみが、私に流れ込んできた。
彼女は、最後まで、この腐りきった男を愛そうとしていた。。
無理やり働かされ、追い詰められ、心中まで図ろうとした。

殴ってやりたい。殺してやりたい。
けど奴は、壁の向こう……
私は怒りをこらえるのに必死だった。

その日から、私は、自分の顔が嫌いになった。
鏡で自分の顔を見ると、激しい憎悪にとりつかれ、気が変になりそうだった。

そんな時、テレビで、ある小説家を見た。
その小説家は、あるバレエティー番組で、話をしていた。
その話の内容に私は共感した。
彼は、私と同じ信念の持ち主であり、私以上に強い信念を持っていた。
私は、彼の虜になり、この忌まわしい自分の顔を整形して彼とソックリに作り変えた。

それからの私は、今以上に仕事を懸命にやった。
いつか、彼女が助かる日を信じて……

小説っぽい文字数の多い「常雄右腕」

男二人がデスクに座っていて書類の整理をしている。一人は、片方の男のアシスタントという感じであり雑務や経理を担当する。一人は腕、いわゆる技術を売る仕事をする。この二人のしている仕事は弁護士業であり、ここの建物は、つまるところ弁護士事務所である。

この弁護士事務所は、ある男の強い野望により設立された。その男の名を常雄右腕といい事務所の名を「常雄弁護士事務所」という。常雄弁護士事務所は、アシスタント役と、常雄の2人で切盛りされている。

常雄は弁護士としては若く、他のベテラン弁護士と比べて大きな実績は無いが、裁判以外の弁論に強く先方を洗脳する術に長けていた。その為、パイプ役となるクライアントの確保にも恵まれていて、一般的な弁護士と比べて早い段階から独立する事ができたのである。

正午過ぎの昼下がり、常雄は、いつもの様に弁護士事務所を出た。10月に入ったとはいえ、まだ、夏の暑さが残りセミが鳴いている。エアコンのきいた事務所から出た途端に汗が噴出し、その汗を拭いながら通りへと歩きだした。

北に100m程歩いたところで大きな雑居ビルの通りに出た。渋谷通りである。男女のカップルやナンパ待ちの女の子、その他多様な目的の人々が右往左往している間を抜ける。

途中、常雄は、ふと誰かの視線を感じた。視線の感じた方向に目をやるが居るのは、ありふれた人ごみであり彼は気のせいだと思うようにした。

常雄の目的地は、この人ゴミを抜けなければならない。100m程この人ゴミを抜けて真っ直ぐ進むと巨大なビルディングが、いくつも、そびえ立つ。このビルに常雄のクライアント、いわば打ち合

わせをする顧客が居る。
常雄は、この人ゴミの多い通りをようやく抜け切った所で、目の前に女が一人立たずんでいるのに気が付いた。女は、目を見開きどこか遠くへと視線を向けている様であるが、その視線の先を常雄は見る事はできない。女の視線の先は常雄であり、真っ直ぐ常雄に向けられているのであった。
「何か用ですか？」
常雄が女に尋ねようとしたその時、女は、右手をバックへと入れた後、出刃包丁を取り出したのである。女の顔は、みるみる鬼の様な形相になり、そして――――

気付いた時には、その女の顔が目の前にあった。
「う！」
常雄に激痛が走る。その激痛は足元から込み上げる如く脳天へと突き刺さる様な痛みであった。その痛みに何が起きたのか理解できない常雄だが、その何かは女が常雄に刺した包丁を抜く事で悟る。
常雄の脇腹から滴れ落ちる、その赤は間違いなく常雄の血であり、命の絆と言える物である。
常雄にとって、自分に何が起きたのかを理解するのに、その赤を見るので十分だった・・・

常雄にとっては、これは理不尽な出来事であった。人に恨みを買うような生来き方をしてきた訳じゃないし、それどころか人に胸を晴れる様な人生を送ってきたつもりだった。それなのに、なぜ、こんな事になっているのか？　そんな人生への失望と無念が入り混じりながら、常雄は、思考を巡らす。頭に在るのは、「なぜ？」という言葉のみである
その疑問を拭い去る為に女の顔を見上げる。だが、痛みでそれど

ころでは無い常雄は蹲まってしまう。
「うぅぅ・・・」
常雄は声にならない声を上げる。女に聞きたい事は山ほどあるが痛みで声が出ない。
「私と一緒に死んで・・・」
女は絶望に満ちた表情で涙を浮かべているが、それは常雄には判らない。ただ、その涙は零れ落ち常雄の肩を濡らす。
女からは常雄を責め立てる言葉が並べられるが、それも常雄には理解できない。というよりも理解しようとする力が残っていない。常雄の意識は朦朧しはじめ、意識を失っていくのであった――――

☆

常雄はベットの上をで目を覚ました。全ては夢か幻か、いずれにせよ意識を失っていた様であり、自分に何が起きたのか周囲を見渡してみる。だが、夢でもなんでもない。医療機器に囲まれ、自分が女に刺されてしまい重症になっているというのが明らかであった。
「痛！」
常雄が動こうとすると激痛が走る。この激痛と向き合うと自分が今、なぜ、この様な状況に陥ってしまったのか、どうしょうもなく知りたくなる。そして痛みを感じる事で、この理不尽な状況を見つめさせる。常雄はパニックに陥り訳も判らずに手を動かす。そして見つけた。ナースコールを……
1分程でナースがやってきた。その3分後くらいに医者らしき男がやってきて常雄に容体等、説明したのだが常雄は医者の言葉が耳から左に抜けるように聞いていない。全く上の空という感じである。人生に絶望したかの様なその表情は、命があるという有り難味すら

感じいない様にも思える。
　というのもこの常雄、ケガをした事で現在抱えている裁判の仕事がオジャンニなった事を絶望しているのである。常雄にとって、今回の裁判の仕事は一世一代の大仕事であり絶対にやり遂げなければならなかったからだ。この仕事をやり遂げて成果を上げる事が可能であるならば彼は、この業界で自分の存在を認められ「勝ち組」として優越感と名誉の称号を得る事ができるからである。だが、その希望は無常にも今回の事件で消え去ったのである。
　弁護士という職業は、基本的に、商売と同じである。いくら資格があろうとも業績を収め業界に名を売らなければ仕事は手に入らないのである。もちろんサラリーマンの様に何処かの弁護士事務所に所属してそれなりの成果を上げる方法もある。だが、常雄は個人事業主としてフリーの弁護士として独立していたから、完全に歩合性なのである。今回の裁判の成功報酬は数千万以上であり、常雄が一年間に平均１００件の裁判をこなして得られる報酬のはるか上なのである。どんな弁護士でも絶対に成功させたい仕事であり、それが奪われた常雄は失意のどん底であったのだった。
「常雄さん。ちょっといいですか？」
　そんな失意のどん底にあった常雄を尻目に来訪者が現れ話しかける。来訪者は警察を名乗り事の成り行きを説明する。
「常雄さんを刺した被疑者は現行犯逮捕しましたが――――」
　警察の説明によると被疑者、いわゆるあの女は、私の事を恋人と間違えて刺してしまったのだそうだ。彼女は男女関係のもつれにより無理心中を図ろうとしたらしのである。全く在り得ない様な話であるが起きてしまったのだからどうにもならない。仕事を失った怒りを抑える事もできないし彼女に責任をブツケルしかないのである。私は彼女に慰謝料を請求することにした。不等とも言える莫大な金額の慰謝料を――――

☆

常雄はケガも完治して日常生活に戻っていた。仕事にも復帰できる様になり何かを忘れる様に没頭して仕事に取り組んだ。そんな仕事の日々が2ヶ月くらい続いたある日、常雄は、自分を刺した女の事を思い出していた。

（彼女も精神的に追い詰められていたのだろうか……）

常雄は時間が経過したと共に冷静さを取り戻したのだろうか、自分以外の事を考える余裕が出来ていたのである。

常雄は、弁護士の力とも言える弁論で彼女に対して莫大な慰謝料を請求していた。だが、この金額は常識の範囲内を超えるものであり、いくらなんでも一般人が背負うには余りにも重い金額であったのだ。一生掛かっても返せない様な金額を一人の人間に押し付けてしまった事実に対して常雄は後悔していたのである。その後悔の念は日に日に強くなった。そもそも彼女は、恋人関係が上手く行かずに心中を図ろうとする程に追い詰められていた。そんな死の淵に立たされた人間を更に突き落とす様に慰謝料の請求をしたのである。それなのに彼女は毎月、常雄に高額な慰謝料を振り込み続けて居る。下手をしたら、自殺行動を取るかもしれないのである。

心配になった常雄は行動を起こした。

☆～公園のベンチにて～

午後3時33分33秒　公園のデジタル時計は、その時刻を指す。

公園には誰もいない。居るのは常雄と常雄を刺した女だけである。2人はベンチに腰を掛けて会話をしていた。

「いいんですか！？　本当に、もう慰謝料を払わなくて？」

常雄は、法外な慰謝料を女に請求したことに対して罪悪感を感じていたからか、それとも単に余計な事を考えずに日々の生活に戻りたかったから、いずれにせよ常雄は彼女にとって＋になる事をした。

そして常雄は、前から気になっていた疑問を彼女に尋ね様とした

――――だが、常雄が尋ねるのも束の間、「では、これで失礼します」

女は常雄の声を遮る様に、あいさつをして駆けていく。

「あ！　ちょっと待って！」

常雄の声は、女に届いていないのか、彼女は、振り返る事無く走っり去って行った

。彼女の走り去る姿を見て釈然としない常雄は、ふと彼女が忘れ物（ハンドバック）をしている事に気付いた。

（まだ間に合う）

常雄は彼女の後を追いかける。彼女が去ってから時間的にみて既に５０ｍくらいの距離が離れているだろう。公園とはいえ、ここは繁華街にある寂れた公園であり、通りも建物も入り組んでいる。後を追いながらも急がないと見失ってしまうと思った常雄は、面倒な愚痴は吐き捨てながらも走る。

彼女が入って行く場所は、なんとも煌びやかな装飾が施されたネオン街であり、彼女はその中の一件の建物に入った。常雄は建物に掲げてある看板を見て――――

☆

『ファッションヘルス　―ジェニファー』

私は、その看板を見て服屋かと思ってその店内に入ったが、思っていたのと様子が大きく違った。店内はピンク色のダークな明調で受付には女性のカタログが並んでいた。いわゆる風俗店である事を知った。

そして私の抱いていた疑問は晴れた――――

☆

常雄は、女が忘れ物をする程焦っていた理由が判ったと同時に当初、女に対して抱いていた疑問が晴れたのである。
その疑問は、慰謝料という高額な代金をどうやって女は捻出していたかという事であった。
その捻出方法を理解した時、常雄は、どうしょうもない罪悪間に捕らわれた。
常雄は自分が彼女を風俗に通わせてしまう程に追い込んでしまったと思うのであった

「すまない」
という表情を浮かべ、常雄は店を後にするのだが、そこで常雄は背筋に嫌な感覚が走ったのである。
直感とも言うべき感覚だろうか、常雄は、その嫌な感覚を取り去る事ができないまま日々の生活を過ごしていた。
そしてある日、思い出した様に法務局へと足を運んだ・・・、

常雄の嫌な予感は的中していた。
あの女の勤めていた店は、いわゆる闇風俗店であり、届出等していなかったのだ。

常雄は思い出して想像してしまう――

自分が弁護士バッジを付けまま闇風俗店に入ってしまった事を――

そして、もし、闇風俗店が裏で暴力団と繋がっていたら――

そして、もし、私が違法風俗店を摘発する為の証人として、彼女を利用していたと、暴力団に勘違いされていたら――――

彼女の身に危険が及ぶ！

☆

常雄は彼女に連絡を取ろうとしたが何度コールしても繋がらなかった。嫌な予感が拭えず思わず闇風俗店に駆け込むのだが、店の外には閉店という2文字が書かれたビラが張ってあるのみ。

常雄の嫌な予感は的中してしまった。摘発を恐れた闇風俗は面が割れる前に夜逃げしていたのである。外から見える店内の様子は、何もない。人も誰一人いないという感じだった。それどころか店は、まるで神隠しにあったかの様に、風俗店の面影すら無かったのである。

そして彼女も恐らくそれに巻き込まれたか――――あるいは・・・

常雄は念のために彼女の住んで居たアパートを尋ねた。だが、彼女が家に帰ってきた形跡は無い。何度も足を運ぶが、やはり彼女は帰らない。

常雄は彼女の親御さんの連絡先も調べてみたが彼女に家族は居なかった。

だれからも、捜索願も出されない。

だれからも、助けるられることは無い。

常雄は、この時、初めて闇の世界の卑劣さを知った。
最初から誰にも心配される事のない人を利用すれば、何をしても足が付く事がないのである。
仮に彼女を証拠隠滅の為に殺したとしても、誰も彼女を気にかける者などい等いないのである。これが奴らの手口である。

☆

常雄は警察に捜索願を出したものの捜査が進展する気配は全く無かった。
常雄は後悔していた。
全てはあの日、自分が我を失って、自暴自棄になっていたから・・・
全ては、それが原因で、彼女を追い込んでしまったからだ・・・
全ては自分の責任だ・・

常雄は、自分を責める理由をあれこれと探している内に、自分への憎悪がこみ上げてきた。
そしてその憎悪の矛先は、最終的に暴力団組織へと向けられた。
全ての原因は、そこあるといわんばかりに常雄は行動を起こすのであった。

☆

常雄はまず、弁護士のネットワークを使い、過去の暴力団関係の案件を徹底的に調べた。彼の気持ちが通じたのか、警察関係者に、つながりのある弁護士が協力してくれた・

調べていくと、
奴ら違法風俗店は訴訟の警告を受ける段階で逃げている事がわかった。
偽名を使いヤバクなった逃げる。別の土地で、また偽名を使い風俗店を経営する。
同じような手口で、全国を転々と移動していた。。

だが、奴らの正体、居場所などは特定できなかった。
別の暴力団達も同じような手口で違法風俗店を経営していて、それが無数に存在するのだ。どの風俗店が、どの暴力団と繋がりがあるのか、全くわからなかった。

弁護士仲間の話によると、日本中のあらゆる土地で、これと同じ犯罪が繰り返されているのだそうだ。、
警察も犯人を捕まえても捕まえても、違法風俗店の数が減らない事に嫌毛がさしているのだそうだ。、

私は、腹が立った。
奴らや組織もそうだが、全ての人間にも……
そこに通う客、そこに違法風俗店があるのに、周りの人間が気づかない無頓着さ。

だが、それは、自分に対しての言い訳だった。
元はと言えば、私が彼女を追い込んだ様なものなのだ。
常雄は、自分自身の無頓着さに腹を立てていた。
、
せめて、彼女から、連絡さえあれば、助けられる希望はあった。

だが常雄の携帯が鳴ることは、一度も無かった……
・
・
・
気が付くと私の生き方は変わったいた。
企業相手の金儲けの主義の様な依頼は断るようになり、、
暴力団相手の訴訟に勤めていた。。

☆

私は、やれるだけの方法を使い、片っ端から暴力団の摘発に人力を注いだ。
そうしていれば、いつか彼女の手がかり得られると思ったのだろう。
まるで愛しき人を助けるかの如く常雄は、その仕事に力を注いだのであった・・・

そしてその過程で、ついに彼女へと繋がる手がかりを見つけた。

～刑務所の中で、ある囚人と2人きり～

囚人は、暴行、窃盗、覚せい剤、等、あらゆる犯罪を犯していた。
私は今回、この暴力団関係者の囚人から情報を聞き出そうとしてたのだが、相手にされない。
囚人は、ただ、のらりくらりと、話題を摩り替えるだけであり、一向に目的とした情報は得られなかった。

囚人は、暴力団とは全く関係の無い思い出話に花を咲かせて酔っ

ていた。
「俺は、結構、モテてたんだぜ～～！」
囚人は、麻薬の禁断症状があるのか、視線が定まっていない。
言葉選びも論理的な思考をしていなく、ブツブツ独り事を喋っている様な感じである。
だが、囚人の発したある言葉に、私は硬直したのである。
その言葉の中に、失踪した彼女を連想させるワードがいくつも入っていたのだ。
そして確信を持ったのは、この囚人の顔だった。
丸刈りで、一見すると、判らなかったが、私の顔にソックリであったのだ。

彼女が私を恋人と勘違いして刺してしまった事実・・・
そして、囚人が発するこの言葉・・・
それらを考慮すると、この囚人が、彼女の恋人であったのは明らかだった。

「あの女は、俺にぞっこんだったから、いいなりだった。
紹介した風俗店で俺の為にしっかりと稼いでくれた。
いいヒモだったんだが、一体どこに逃げたんだろうな。
惜しい事をしたなーーーー」

彼女の苦しみが、私に流れ込んできた。
彼女は、最後まで、この腐りきった男を愛そうとしていた。。
無理やり働かされ、追い詰められ、心中まで図ろうとした。

殴ってやりたい。殺してやりたい。
けど奴は、壁の向こう……
私は怒りをこらえるのに必死だった。

その日から、私は、自分の顔が嫌いになった。
鏡で自分の顔を見ると、激しい憎悪にとりつかれ、気が変になりそうだった。

そんな時、テレビで、ある小説家を見た。
その小説家は、バレエティー番組で話をしていた。
その話の内容に私は共感した。
彼は、私と同じ信念の持ち主であり、私以上に強い信念を持っていた。
私は、彼の虜になり、この忌まわしい自分の顔を整形して彼とソックリに作り変えた

それからの私は、今以上に仕事を懸命にやった。
いつか、彼女が助かる日を信じて……

絶対に皆が小説とは認めないだろう「常雄右腕」（前書き）

作者であるシーは、様々なスタイルの小説を投稿して読者の趣味思考パターンの割合を調査研究しています。

ですが、読む前から作者に反感を持つ人が居る感じで1回目投票結果と2回目投票結果を比べてると明らかにデータバランスが偏っています。なので思っていた検証が出来てません。

よって、シー様とクレオを　この小説で始めて知った方のみ投票に参加してください。

宜しくお願い致しますm（＿＿）m

絶対に皆が小説とは認めないだろう「常雄右腕」

スーツを着こなした男、年齢は２０代後半。この男の職業は弁護士。若くしてその才が世間に評価され同期を押しのけて独立を果たす。表面上、この男は、日の打ち所のない完璧人間であるのだが、一つだけ、世間にひた隠しにしている事がある。それは――――

・　・　・

ぴるるるるる

「はい。もしもし、常雄弁護事務所です」

常雄は仕事の打ち合わせについての電話を受けている。

「では、これから御社に伺いますので・・・」

常雄は、裁判に似向けての訴訟の打ち合せの約束を取り交わした。

この裁判の内容は、企業の知的財産権の侵害を受けている企業を常雄が弁護すものである。常雄が引き受けているこの案件は、今、世界中で問題となっているマイクソフトＷＩＮＤＯＷというコンピュータのＯＳシステムの事である。このＷＩＮＤＯＷは、世界中のコンピュータ市場を独占しているソフトフェアであり、独占禁止法にも該当されて話題を呼んでいる。そのＷＩＮＤＯＷというＯＳのシステムを開発したマイクソフトがアッポロ社の技術を使用して作ったとされ、アッポロ社から訴訟を受けているのである。常雄は、アッポロ社から弁護の依頼を受けたのだった。

この裁判は、世界中が注目している。裁判の結果次第でソフトウエア産業の業界が一変する。

この世界中が注目する裁判の依頼が、なぜ、経験の浅い若い常雄の元に舞い込んできたかであるが、それはひとえに常雄の才能にある。

弁護においての常雄の強みは、その弁護力にあるというよりも、

洗脳力にあるといえる。常雄は敵の弱点を付いて裁判を争う気力を萎えさせる事で、裁判そのものでの法律的主張で勝たないのである。常雄は、あくまで勝てる弁護士ではない。負けない戦い方を知っている弁護士であり、法律的な知識も一般的な弁護士と同じ程度である。

実のところ常雄は、マイクソフトとアッポロの戦いを法律で解決するツモリは全く無い。

常雄の持論によると裁判とは、金のあり体力のある企業が勝てると相場が決まっているらしい。裁判をする者は裁判費用が掛かってしまう。裁判費用には証拠物件を調査したり裁判所に提出する。特に、それが組織的な企業になる程に、膨大な数の情報と人間が関わってるケースが殆どで武器となる証拠が永遠で出続ける。

とにかく争うだけで相当費用が掛かる。資金的に体力の無い企業は、争うだけで倒産して自滅してしまう。殆どの弱者企業は、自滅する事を恐れて争いすらしないのが常識である。

アッポロ社とマイクソフト社の資産比率は１：１００程開きがあり、本来はアッポロ社がマイクソフトに勝てる見込みは０

だが常雄は勝てる戦略を持っている――――

☆

「おい右腕！　そこの書類とって！」

「あいよ～」

右腕と呼ばれた男は、軽い感じのノリで常雄に書類を渡す。

この男の本名は、佐藤大輔。右腕という名前ではない。右腕という名は、常雄が勝手につけたあだ名である。その名の通り常雄の右腕の様に役に立つからという単純な理由で、その名が付けられた。

そしてこの右腕という名は　常雄の本名である。

本名「常雄右腕」

この、おかしな名前で、常雄は今までに沢山の苦労をしてきた。子供の頃は、話題のネタにされ虐められ。初対面の人には当然の様に笑われた。「常雄」という難しい漢字だけでも常雄は、人から苗字で呼ばれる事が無いので、いつも「右腕」と呼ばれていた。だから、常雄は右腕という名が、子供の頃は大嫌いだった。だが、大人に成るにしたがって右腕という名が好きになったのである。

仕事上の付き合いでは、初対面の相手に確実に自分の事を覚えてもらえる。そして右腕という名のせいで引き起こされた悲惨な人生を語る事で同情や共感を得て、いとも感単に人と内解けられるからである。

弁護士という仕事上、依頼人との信頼関係は最も重要であり、「常雄右腕」という名は、弁護士の仕事をする上で天職の様な名前であったのだ。

そんな常雄は、ある日、ビッグな仕事が成功して上機嫌だったのか。あまりの上機嫌ぶりに自分の大好きな右腕という名で相棒を呼ぶようになってしまった。

その相棒も少し変わっている。

彼は弁護士の資格が無い。資格が無いというのに弁護士面をしているのである。

彼の存在は、事務所のお飾り。事務所に一人しか弁護士が居ないのでは、社会的な信用に欠けるという理由で、常雄が彼に弁護士の演技をさせているのだ

彼もまた、なぜか、演技をする事に楽しみを覚えていて、生きがいとしている。もちろん彼の役割は、あくまで顧客の話を伸ばして右腕に伝えるのがお仕事である。依頼人を退屈させない様な、法律の話題を知ったかぶりする事が彼の真の役目である。

その役目に彼はピッタリであった。

彼は元々小説家志望の売れない作家であった為か、作り話はそれなりに饒舌なのである。彼もまたこのオカシナ仕事を天職としてい

て、その作り話の合間の暇な時に、常雄の書類整理を手伝っているのだった。

「右腕！　留守を頼む」
「あいよ～」

常雄は、意気揚々と事務所を飛び出して行く。常雄にとっては、今日は大切な日。裁判流れをシナリオ通りに展開にさせる重大な局面であり、一世一代の大仕事である。常雄にとっては、この裁判に勝てば、この弁護業界で不動の地位を得る事も可能であるのだ。
渋谷大通りの人ゴミを進み抜け目的地まであとチョットというところに来て常雄は立ち止まった。
目の前に、見知らぬ美女が居た。
下から上へと・・・常雄は嘗め回す様には見ない。
なぜなら常雄はゲイ。いわゆる同性愛者だからだ。
というわけで、常雄を何事も無く歩き続けるのだが――――

目の前にその美女が立ちふさがる。
「何か用ですか――――」
と、声に出そうとしたその瞬間――――

ブスリ！

なんと常雄に包丁が刺さっているではありませんか！

☆。

ピーポーピーポー
ウーウーウーウー
ガヤガヤガヤ
「なんか外が騒がしいな」
佐藤大輔（あだ名、右腕）は呟く。
右腕は、余りの外のやかましさにイライラを募らせ外へ飛び出す。
外には沢山の人だかり。何事かとその人ゴミの中を分け入り――
「常雄！？」
右腕は、常雄に駆け寄り事の状況を把握しようとする。
「どうしたんだ？　何でこんなことに？」
常雄のわき腹から出血し、その傍らには警察に手錠を架けられた女が一人、顔を真っ青にして蹲っている。その女の手には、赤く染まった包丁があり、明らかに女が常雄を刺したという事が判る。
「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめん――」
女は、執拗に常雄に向かって謝っていた。

「貴方は、この方の知り合いですか？」
救急隊は尋ねる。
「はい！」
「じゃあ、とにかく乗って！」
救急隊は、強引に右腕を救急車へと乗ようとする。
「あの女の方は一体？」
と、尋ねるが、現場の救急隊は答えられる状態ではなく、その問いは無視される。
一刻も早く常雄を病院に搬送しなればならない状況であるらしく、右腕は、いぶかしげに車内に乗り込み発進を待った。
右腕は彼女に聞きたいこが山ほど在ると言いたげな様子で、その場を去るのであった。

ありとあらゆる疑念を残したその現場跡にはポツポツ雨が降り出し、まるで、その疑念を荒い流し去るかの様に排水溝へと流れた――

☆

常雄は病院で無事手術を終えて、昏睡状態である。

「もう大丈夫です」

医者からは、もう大丈夫というＯＫサインが出ているのですが、文章上、退屈なので昏睡状態と書いてみましたｍ（｜　｜）ｍ

小説をフザケンナという罵倒が在りそうですが、こういう事は作者の自由なのでお許し下さい。

とまあ、主人公達は、作者と違って大変な状態であり、常雄はベットの上をで目を覚ますのです。全ては夢か幻かと常雄を想像を巡らします。でも、そんな訳ありません。常雄はそれなりの重症を負っているのは明らかでかであり、読者もそれくらいは既に承知の筈なのでワザワザ説明する気にもなりません。

☆

「大丈夫なのかよ。常雄」

「ああ。なんとか大丈夫だ」

「いや、そっちの大丈夫じゃない。」

「は？　何の大丈夫だよ！」

右腕は常雄にケガをした事で裁判が実行不可能であると説明した。

「なぬーーーーーーー！！」

と、言った事にしたくない！　もうなんか物語のムードが壊れて来ているので作者としては書くのが面倒になって来ているのだ。

作者としては小説らしい小説を書き上げて皆の鼻っ柱を折ってや

りたい気分なのだが、筆が進まぬ。そもそも小説嫌いな作者が小説らしい小説を書ける筈が無いのだ。書こうとすればする程に物凄い苦痛を伴うのである。

とまあ、作者の愚痴は、これ以上は、やめておこうと思う。それだと小説好きの人の心理が理解できないという事になり個人的に嫌である。

僕は、基本的に理解できない事や判らない事をウヤムヤにするのが大嫌いなのだ。

学校のテストの数学の問題とか、問い一つが答えられないだけで、それに永遠執着して時間を浪費する様な人間なのである。だから、小説を書こうとする行為も終わる事が無く続いてしまうのである。だから、ここで愚痴を垂れてても仕方が無いし先に進みたいと思う。

さて、物語が途中で中断して、作者の愚痴を聞かされるという小説に皆は、出会った事があるだろうか？

そもそもコレを小説と呼ぶ自体、反感を買ってしまう事になるのだろうが、実際に僕がこれを小説と思ってるので仕方の無い事なんだと思う。

という訳で、読者さんは、これを小説として受け止めてください m（＿＿）m

では続きを、書きます。

☆

～警察にて～

「なぜ、刺したの？」

刑事は女に尋問する。

「――――違えた・・・」
「え？」
刑事は、彼女の言葉の歯切れの悪さに高圧的な態度で尋問する。
「宮尾と間違えて刺してしまったのです。」
「誰だよ！　宮尾って！？？」

事の経緯を説明すると、この犯人の女は、宮尾という、ロクデナシな男と付き合ってる。
このロクデナシ男のロクでない加減に心身共に追い詰められた女は宮尾と心中を図ろうとしたのである。それが偶然にも宮尾と常雄の顔がウリツタツであったが為に、間違って刺してしまったのである。。

という事情が、彼女にはあるのだが、そんなロクデナシな男のロクデナシ度を詳しくは警察には説明しなかったのである。いわゆる愛という物だろう。宮尾の悪い部分は、やっぱり彼女としては口に出せないのだった。
一方その頃、常雄と右腕は――――

☆

「刺した女に損害賠償請求をしよう。右腕よ・・・後の事は、お前に任せた！」
と、常雄が言ったらオシマイだね。主人公だよ。キャラ的どうよ。という訳で、この台詞は、絶対にありえんという事です。。
一番、良い方法は・・・
「刺した女に損害賠償請求をしよう。先輩、後の事は、僕がやっ

とくよ。」
と、右腕が勝手にした事にすれば良いのである。
ところで・・・これまでの文章で右腕は常雄の事を先輩とは呼んでませんでした。ですが作者の気が変わったという事で、ここから、先輩表記で行きたいと思います。

という訳で右腕は、いろいろ弁護士に手配して手続きを済ませた。
刺した女には、２０００万円という損害が乗って掛かりました。

そして、皆、何事もなく日々の生活へと戻りました。
当初は、もちろん、常雄も右腕もあの一世一代の仕事を失った事に対して絶望していました。
けれど、苦しみは時が癒します。
常雄と右腕は、日々の仕事に追われている内に、あっという間に忘れたのでした。
☆

ですが、ふと常雄は刺した女の事を思い出します。
間違って刺したとはいえ、彼女は心中を図る程に追い詰められていたのです。同情したのかもしれません。
そして、つい常雄は、こんな考えを抱きました。
（刑事罰を取り下げる様に減刑を図ったら、それは社会的に心の広い人を演じられるし自分を宣伝するのに調度良いな・・・ついでに彼女に同情して損害金賠償請求も無かった事にしてしまえば、この宣伝の威力は物凄くなる。）

いけません！　こんな発想は、僕の求めていた常雄右腕の物語じゃありません！
皆、この文章は忘れてください。

常雄は、あくまで善意の精神で同情、減刑と損害賠償免除を自ら申し出しました！
でも、恩着せがましのは嫌なので、減刑のシーンと、彼女から受けた金を返しに行くシーンはカットして、全部、終らせたトコに飛びます。

☆

～公園のベンチにて～

「いいんですか！？　本当に、もう慰謝料を払わなくて？」
「いいんです。貴方もさぞ辛かった事でしょう。」
常雄は、いかにもいい人。とにかく良い人。
でも、女は謝罪もそうそうに別れを告げ、足早に走り去っていきます。
「あ！　待って・・・」
常雄は、聞きたかった事が一つあったのですが、聞く前に彼女に逃げられます。

「ん？」

ハンドバック忘れてるぞ

ε＝ε＝ε＝ε┐（゜、Д、゜）┘まて～

という風なノリで彼女似忘れ物届けようとしました。
だけど、この癒しな顔文字のテンションとは裏腹に、彼女は風俗店へと入っていくのでした。

～風俗店にて～

『ファッションヘルス　―ジェニファー』

店に入る前に常雄は考え事をする。別に、イヤラシイ事を考えてる訳じゃない。常雄は同性愛であるのだ。考え事は彼女についてである。常雄は自分が彼女に損害賠償という多額な金を吹っかけたせいで、風俗で働くハメになったと責任を感じているのである。

公園で別れ際に聞きたかったのも「君、何の仕事しているの？」という感じの事でした。

いずれにせよ、常雄は、「すまない」
という表情を浮かべ店を出る。
だが、そこで常雄は背筋に嫌な感覚が走ったのである。

その感覚が気になった常雄は、日々の生活に戻る事ができない。
なぜなら、僕と同じ様に常雄も目の前の問題を深く考えてしまう傾向にあるのだ。

そうしてある日、常雄は思い出した様に法務局へと足を運ぶ。
常雄が調べていたのは、風俗店営業の届出である。
その届出が無いのを確認した常雄は、妄想を膨らませる。

常雄は思い出して想像してしまう――――

自分が弁護士バッジを付けまま闇風俗店に入ってしまった事を――

そして、もし、闇風俗店が裏で暴力団と繋がっていたら――――

そして、もし、私が違法風俗店を摘発する為の証人として、彼女を利用していたと、暴力団に勘違いされていたら――――

彼女の身に危険が及ぶ！

☆

常雄は彼女に連絡を取ろうとしたが何度コールしても繋がらなかった。嫌な予感が拭えず思わず闇風俗店に駆け込むのだが、店の外には閉店という2文字が書かれたビラが張ってあるのみ。

常雄の嫌な予感は的中してしまった。摘発を恐れた闇風俗は面が割れる前に夜逃げしていたのである。外から見える店内の様子は、何もない。人も誰一人いないという感じだった。それどころか店は、まるで神隠しにあったかの様に、風俗店の面影すら無かったのである。

そして彼女も恐らくそれに巻き込まれたか――――あるいは・・・

常雄は念のために彼女の住んで居たアパートを尋ねた。だが、彼女が家に帰ってきた形跡は無い。何度も足を運ぶが、やはり彼女は帰らない。

常雄は彼女の親御さんの連絡先も調べてみたが彼女に家族は居なかった。

だれからも、捜索願も出されない。

だれからも、助けるられることは無い。

常雄は、この時、初めて闇の世界の卑劣さを知った。
最初から誰にも心配される事のない人を利用すれば、何をしても足が付く事がないのである。
仮に彼女を証拠隠滅の為に殺したとしても、誰も彼女を気にかける者などい等いないのである。これが奴らの手口である。

☆

常雄は警察に捜索願を出したものの捜査が進展する気配は全く無かった。
常雄は後悔していた。
全てはあの日、自分が我を失って、自暴自棄になっていたから・・・
全ては、それが原因で、彼女を追い込んでしまったからだ・・・
全ては自分の責任だ・・

常雄は、自分を責める理由をあれこれと探している内に、自分への憎悪がこみ上げてきた。
そしてその憎悪の矛先は、最終的に暴力団組織へと向けられた。
全ての原因は、そこあるといわんばかりに常雄は行動を起こすのであった。

☆

常雄はまず、弁護士のネットワークを使い、過去の暴力団関係の案件を徹底的に調べた。彼の気持ちが通じたのか、警察関係者に、

つながりのある弁護士が協力してくれた・

調べていくと、
奴ら違法風俗店は訴訟の警告を受ける段階で逃げている事がわかった。
偽名を使いヤバクなった逃げる。別の土地で、また偽名を使い風俗店を経営する。
同じような手口で、全国を転々と移動していた。。

だが、奴らの正体、居場所などは特定できなかった。
別の暴力団達も同じような手口で違法風俗店を経営していて、それが無数に存在するのだ。どの風俗店が、どの暴力団と繋がりがあるのか、全くわからなかった。

弁護士仲間の話によると、日本中のあらゆる土地で、これと同じ犯罪が繰り返されているのだそうだ。、
警察も犯人を捕まえても捕まえても、違法風俗店の数が減らない事に嫌毛がさしているのだそうだ。、

常雄は、腹を立てていた。暴力団という卑怯極まりない暴力団に腹を立て、また、それを肯定してしまってる人々総てに腹を立てた。そこに通う客。そこに違法風俗店があるのに、周りの人間が気づかない無頓着さ

だが、それは、常雄にとっては自分に対しての言い訳にすぎなかった。
常雄は責任を感じていた。自分が彼女に大金を吹っかけなければ、闇風俗等で働く必要などなかったかもしれないからだ。

常雄は、自分自身の無頓着さに腹を立てていた。
、だが、常雄が幾ら腹を経てた所で現状は、殆ど何も変らない。
せめて、彼女から、連絡さえあれば、助けられる希望はあった。
だが常雄の携帯が鳴ることは、一度も無かった……
・
・
・
どれ位の月日が絶っただろうか、常雄の往き方は大きく変っていた。
企業相手の金儲けの主義の様な依頼は断るようになり、暴力団相手の訴訟に勤めていた。

☆

常雄は、昼夜働きまくり、片っ端から暴力団の摘発に人力を注いだ。
そうしていれば、いつか彼女の手がかり得られると思ったのだろう。
まるで愛しき人を助けるかの如く常雄は、その仕事に力を注いだのであった・・・
そしてその過程で、ついに彼女へと繋がる手がかりを見つけた。

～刑務所の中で、ある囚人と2人きり～

囚人は、暴行、窃盗、覚せい剤、等、あらゆる犯罪を犯していた。
私は今回、この暴力団関係者の囚人から情報を聞き出そうとして

たのだが、相手にされない。
囚人は、ただ、のらりくらりと、話題を摩り替えるだけであり、一向に目的とした情報は得られなかった。

囚人は、暴力団とは全く関係の無い思い出話に花を咲かせて酔っていた。
「俺は、結構、モテてたんだぜ～～！」
囚人は、麻薬の禁断症状があるのか、視線が定まっていない。言葉選びも論理的な思考をしていなく、ブツブツ独り事を喋っている様な感じである。
だが、囚人の発したある言葉に、私は硬直したのである。
その言葉の中に、失踪した彼女を連想させるワードがいくつも入っていたのだ。
そして確信を持ったのは、この囚人の顔だった。
丸刈りで、一見すると、判らなかったが、私の顔にソックリであったのだ。

彼女が私を恋人と勘違いして刺してしまった事実・・・
そして、囚人が発するこの言葉・・・
それらを考慮すると、この囚人が、彼女の恋人であったのは明らかだった。

「あの女は、俺にぞっこんだったから、いいなりだった。
紹介した風俗店で俺の為にしっかりと稼いでくれた。
いいヒモだったんだが、一体どこに逃げたんだろうな。
惜しい事をしたなーーーー」

彼女の苦しみが、私に流れ込んできた。
彼女は、最後まで、この腐りきった男を愛そうとしていた。。
無理やり働かされ、追い詰められ、心中まで図ろうとした。

殴ってやりたい。殺してやりたい。
けど奴は、壁の向こう……
私は怒りをこらえるのに必死だった。

その日から、私は、自分の顔が嫌いになった。
鏡で自分の顔を見ると、激しい憎悪にとりつかれ、気が変になりそうだった。

そんな時、テレビで、ある小説家を見た。
その小説家は、バレエティー番組で話をしていた。
その話の内容に私は共感した。
彼は、私と同じ信念の持ち主であり、私以上に強い信念を持っていた。
私は、彼の虜になり、この忌まわしい自分の顔を整形して彼とソックリに作り変えた

それからの私は、今以上に仕事を懸命にやった。
いつか、彼女が助かる日を信じて……

絶対に皆が小説とは認めないだろう「常雄右腕」（後書き）

クライマックスに行くつれて、どうしても同じ文章を使ってしまう。
これはひとえに自分の文章が最高だと自負しているからである。
感情移入すると一人称の「私」を使って書いてしまい主人公に同調してしまう。

もし、ラストに行くにつれて感情移入できなくなるとしたら、それは、読者が主人公や作者と比べて、かけ離れた人生を歩んでいるという証拠なのかもしれない。
いわゆる主人公と作者の気持ちが理解できないという証であると思う。

小説っぽい「常雄右腕」は、かなり苦痛で嫌々書いた文章だったのだけど、その苦痛のお陰か、自分では納得できる作品となってしまっている。
痛みを共にした文章だからこそ、愛おしさを感じているのである。

もしも、書店にあんな文体の本が置いてあったら、僕は、3行読む時点でダウンするところだ。
けど、自分で自分のを読む分には、愛しているせいか抵抗が無いので、これまた最高な作品な訳である・・・不思議だ～

前に、エロ作家のごはんライスも言ってた。
「自分の感性をそうでない感性の者に伝えるのは、物凄い苦痛が伴うのだ。」

今なら、この言葉の意味が良く判る。

おまけ編　暴力団にさらわれた女

揺れている？
私は、起き上がった。
頭がガンガンする。
まるで2日酔いしたみたいな頭痛がする。
私は、どうしたんだっけ？
わからない。
私に何があったの？

私は・・・確か仕事を終えて、家に帰るとこだったはず。
あれ？そこからの記憶が無い・・・
思い出そうとして思い出せない。
考えれば考えるほど、気持ち悪くなる。

一旦、思い出すことを諦めて、今、自分のおかれた状況を把握することにした。
ここは、どうやら大型のトラックのコンテナの中のようだ。
周りには人居た。知っている顔である。
仕事場の仲間達だ。
仲間達は１０人ほどいた。
皆、気を失っているようだった。。
私は皆を起こした。

皆が起きて、状況を把握して落ち着いた後、
何があったのか聞いた。
私と同じように、記憶が途切れているようだったけど、気がかりな事を覚えている子が居た。
その子の話では、自宅の玄関のチャイムが鳴って、小窓をのぞいて、

男の人を見たという。
その男の人は、職場の上司であったそうだ。
ドアを開けようとしたらしいが、その後の記憶は、無いらしい。

どうして上司が・・・
私達は理由が判らなかった。

私達は、どれくらい車に揺られていただろうか、
３時間ほど経ち、車が止まった。
だが、コンテナは、空くことはなかった。

私達は必死で外に出ようとしたが、無理だった。
大声を出しても、誰も助けには来てくれない・。

コンテナの中を良く見ると、大きなボックスを見つけた。
その中には、食料と水と、簡易式トイレ、注射器と液体、そしてメモが入っていた。

メモの中身は・・・

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
君達、風俗嬢は、実は無許可の違法風俗店で働いていました。
この度、この風俗店が摘発されそうになり、証人となりえる君達は、処分されることになりました。

処分といっても社会的に隔離するという意味で、殺されるわけではありませんので安心してください。
　ですが、人に助けを求めたりする行為をすれば、殺されることを肝に銘じてください。
　君達を信用しないわけではありませんが、念の為に、注射を打たせていただきました。
　注射の中身は、覚せい剤になります。
君達は、これから、禁断症状にさいなまれ、覚せい剤を欲しくなります。
　ここで、一ヶ月程過ごし、覚せい剤付けになり、私達の奴隷となってください。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

おまけ編　つづく・・・

〜後書き〜
登場人物が多くて会話が入り乱れる＝文字数が増える・・・
書くの面倒なので良かったら誰か続き書いてくださ〜〜〜い
m（＿　＿）m

おまけ編　自分を殺させる男

○あらすじ○
ある悪い男と悪い弁護士と、それに振り回される女の物語

○本文○

「あなたの彼女に・・・あなた自身を殺させるようにしてください。」
弁護士は、そう俺に言ってきた。
その弁護士は、前払いの報酬として５００万。
成功報酬として更に５００万、そして・・・永遠に麻薬の横流しをしてくれると約束した。
悪い男だ・・・

だが、そういう俺も十分、悪い男だ。
自分で言うのは何だが、俺は、悪い人間だ。
ごろつきと言うやつだ。
でも、ただのごろつきじゃない。
俺は、モテる。

俺の彼女は、俺に沢山の金品を貢いでくれる。
とても都合のいい女だ。
女には、風俗で働いてもらっている。

俺は、沢山の借金がある。
正直、参っている。
闇金から、金を借りてしまい利息で、借金の額が１００倍くらいになっている。

俺は頭が悪かったから、闇金の仕組みをぜんぜん知らなかった。
返す必要ない借金を払い続けていた。。けど、具体的にどうすれば、
怖い借金取りから、逃げられるかは判らなかった。
俺は、すがる様に、無料の弁護相談会に参加した，

そんな時、その変な弁護士と、出会ったんだ。
その弁護士が言うには、殺したい男が居るのだそうだ。
偶然にも、その殺したい男の顔と、俺の顔が、ソックリで、彼女に
俺と勘違いさせて殺させたいと言うのだ。

どうして、そんなまどろっこしいことをするのか俺は疑問だった。
闇討ちして殺せばいいことだし、俺が殺しても良いと思った。
けど、弁護士は、それでは駄目だと言ってきた。

けど、俺は、犯罪の方法が判らなかった。
恨まれて殺させるなら、判るけど、それじゃあ、本当に自分が殺さ
れてしまう。
だが、弁護士は、全てが上手く行く方法を教えてくれた。

俺は、報酬さえ貰えれば、それでいいと思った。
弁護士との契約は成立して、俺は５００万を手に入れた。
そして弁護士が提案した方法を実行に移した。
ー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーー
ーーー腐った男の彼女　編ーーーーーー

私は、今日も彼の為に稼ぐ。嫌だけど今日も仕事に行く。。
全ては、彼の夢の為、彼のミュージシャンとしての夢を叶える為だ。

彼は、言ってくれた。「成功してビックになったら、結婚しよう」
と・・・

仕事中、彼から電話が掛かってきた。
彼は、急ぎの用で直ぐに来て欲しいとのことだった。
呼び出された場所は、人気のない公園だった。

そこで私は、男たちに囲まれた。
私は、その場で、男たちにレイプされた。

男たちが去った後・・・

私は、彼に電話を掛けて助けを求めた。
彼はこう言った。
「おお！！どうだ気持ちよかったか？」
「俺、お前のこと飽きたからさ、その男たちにお前を譲ったんだ」

・
・
・

ーー腐った男　編ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

弁護士の指示通りにしたら上手くいった。
女は、俺に泣きながらすがり付いて来た。
俺に他の女が出来たと言い。
そして、これから、その女と待ち合わせする事、その待ち合わせ場所を伝えた。

俺は、勿論、その場所になど行かない。
行くのは、俺の変わりに殺される男だ。

任務は成功した。
俺は、契約どうり報酬をもらいに行った。

弁護士は、麻薬を流通させているマフィアにコネを持っている。
俺は、その弁護士の計らいで、好きなだけ麻薬をもらえることになっているのだ。

その待ち合わせ場所で、俺は待った。
程なくして、一人の代理人が麻薬を持ってきた。
俺は、その麻薬を受け取り、喜び勇んで帰ろうとした。

と、その時。
警察が乗り込んできた。
俺と、その代理人は、そのまま刑務所送りとなった。
弁護士からの連絡は、その後、何も無かった。

俺の真実は、誰も信用してくれなかった。
弁護士にハメラレタと気づいた時には遅かった。
俺は、悔しさと、怒りに、狂い。
麻薬の禁断症状に錯乱する日々を送り続けることになっていたのだった・・・

おまけ編　弁護士はマフィアの息子

俺の親父はマフィアのボスだ。
悪い事を沢山している。
そんな親父が大嫌いだ。

俺は、正義の味方・・・弁護士になるんだ。
そう決心したキッカケは、母がまだ生きていた頃だ。

母は、親父にひどい仕打ちをされた。
母は病気で先が長くなかったのだけれど、
親父は母の見舞いに一度も来る事は無かった。

それでも母は、親父の事を愛していた。

俺は、親父に必死で見舞いに来るように頼んだけど、まったく聞き入れてもらえなかった。
そんな親父が許せなかった。

あんな親父にだけは絶対になりたくない。
いつか、親父を倒してやる・・・大きな力が欲しい・・・
そう心に誓って生きた。

親父は放任主義だった。
俺が学校でトラブルを起こそうとも、何にも関与してこなかった。

気付くと俺は好き放題していた。
クラスメイトを苛めたり、ケンカをしたりの日々だった。

そんなある日、俺はケンカで返り討ちにされ、負けてしまった。
自分が許せなかった。
自分より強い奴を認めたくなかった。
俺は、その日から、毎日イライラして、物や弱者に八つ当たりしていた。

そんなある日、テレビのドラマで弁護士という職業を知った。
その弁護士は、怖そうな屈強そうなヤクザに、勇気を持って立ち向かっていた。
弁論でヤクザを言い負かし、追い払っていた。

俺は、それを見て、弁護士という職業に憧れた。
俺は、その日から弁護士になることを決意した。
俺は、今まで、勉強しなかった分、猛勉強をした。

親父には内緒で司法試験を受けた。
努力の甲斐あってか合格し、弁護士への道が開けた。

「俺は弁護士になる」
俺は親父に、そう宣言した。

「ふざけろ！！　お前は、跡取りになるんだ。俺の後を継ぐんだ！！
馬鹿なことは言うんじゃない！！」

「馬鹿は、親父のほうだ！　俺は最初からそんな気はさらさら無い！
俺は、お前という存在が嫌いだから、弁護士になって潰すんだ！！」

親父は勘当宣言して親子の縁を切ってきた。
上等である！　俺は慰謝料として家にある金をあるだけ持って家を出た。

家を出た後の俺は、毎日、必死に頑張った。

俺は念願の弁護士になることが出来、初の仕事をする事となった。

俺は、必死で戦った。
だが、負けてしまった。
俺が負けた相手は、俺と同い年くらいの男だった。
悔しかった。俺は自分が許せなくなった。

そいつとは弁護士との交流会で再び出会った。
その弁護士は俺の顔を覚えていた。
俺に近寄り、慰めの言葉をかけてきた。

俺のプライドは傷ついた。
俺は、こいつより劣っているのか？
こいつよりも負けているのか？

俺は、そいつを見返してやる為に、必死で法律の勉強をした。
どんな裁判にも負けたくない。
ただ、それだけだった・・・

だけど、俺は、どんな裁判にも勝てなかった。
今思えば、単純に運が悪かっただけかもしれない。
だけど俺のプライドはズタズタで、どうしょうもなくなっていた。

俺は、知らず知らずの内に、壊れていった。

気付くと、組の麻薬に手を出してしまっていた。
組の者達にとっては、俺は、まだ、父の息子であり、俺に逆らうことが出来なかったのかもしれない。

悔しかった。
結局、親父に負けてしまっている・・・

ある日、また、弁護士との交流会で、その男と会った。
男は、前々から俺が目を付けていた女弁護士と、イチャイチャしていた。
俺は、そいつらの間に割り込んで邪魔をしようとした。

すると、女が突然俺を見て、笑顔で話し始めた。

どうやら、この男が、ビックな仕事の依頼を受けたそうだ。
女は、メス犬のように、この男にこびるようにしていた。
まるで、自分の手柄のように自慢して・・・

俺は、悔しかった。
なぜ、こいつなのだろうか？
俺にだって出来るはずなんだ。
その仕事は俺の方が相応しい。

俺は、そいつから、そのビックな仕事を奪うことにした。
組のコネを使って男を陥れ、仕事を奪い取ってやった。

俺は、その仕事で初勝利を上げた。

そして、そのビックな仕事に勝った事により、俺の名前は業界で有名になった。
有名に成った事で、テレビの依頼が来る様になり、世界が変わった。
何もしなくても女からモテるようになり、弁護士の仕事をやらなくても金が入ってきた。

そんなある日、俺に政界からの声が掛かってきた。
俺は、正義の味方である。断る理由など無い。
むしろ、親父に勝つためなら、政治家の椅子は必要になるだろう。

俺は、政界からの資金援助をバックアップにして見事当選し、議員となった。

俺は政治的な力を得た。だが、まだまだである。
親父に勝つなら、もっと大きな権力が必要である。
目指すは、内閣総理大臣である。

「富士原祐二総理か・・・いい響きだ！」

おまけ編　５％

僕の作ったソフトが何者かに奪われてしまった。

犯人の目星はついている。大企業の「メック」である、

メックが売り出している商品は、医療機関向けの健康診断装置だ。
この健康診断装置は、血液を少し採取するだけで、全身のあらゆる癌の状態がわかる。
また、将来いつ、癌化するのかもわかる。

この診断装置は、飛ぶように売れた。
中小企業だったメックは、儲かりまくり、いまや、世界に並ぶ大企業となっているのだ。

だけど、健康診断装置の元となるプログラムは、僕が作った。
僕にお金が入らないなんておかしい。

この報酬は、生涯賃金１００億になると判った時、僕は激怒した。
自分のソフトの価値がこんなに値が付くなんて知らなかった。
僕は、メックに訴えたが、相手にして貰えなかった。
法律家に相談したけど駄目だった。

僕には、自分が作ったという証拠を一切示すことができなかったんだ。
僕は一人でこのソフトを作っていたから、誰も証人は居ない。

唯一の証人である友達は居たのだけど、
その友達は、僕と知り合って間もなく、僕がソフトを彼に見せた数

日後に居なくなってしまった。
多分、そいつが盗んだのだと思う。
僕は、このソフトが金になるとは思っていなかったから、特許は取得していなかった。
だから、法律上、自分に権利が全く発生していない。

そんなある日、僕の元に知らない人から、電話が掛かってきた。
その人は、頼れる弁護士さんを教えてくれると言って来た。
僕は、その電話の主が気になったが・・・
電話の主は、電話番号を僕に伝えて直ぐに電話を切ってしまった。
電話を掛けなおそうにも、非通知で判らなかった。
僕は、半信半疑な気持ちだったが、、つい、その番号に電話をかけてみた。

ーー常雄右腕　編ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

私は常雄右腕
離婚関係を取り扱うの弁護士だ。
私の元に、ある一本の電話が掛かってきた。
依頼人の話を聞いたが、はっきり言って、勝てる見込みはゼロ。
やるだけ無駄であり、私の裁判の勝率に傷がつく・・・
それどころか、依頼人のこともいまいち信用できない。
依頼人が説明してくれた、ソフトのプログラム技術は、システム技

術分野では最先端の発明である。。
到底、一人で研究して作れる代物ではないのだ。
そんなものが、作れるとしたら、私の想像を遥かにこえた天才としかいえないのだ。
そんなありえない話を私は鵜呑みはできない。

だけど、今、私は参ってしまている。
つい「勝てる」と、言ってしまったのだ。
私の悪い癖が、私の首を絞めたのだった。

私は、問題を、解かずにはいられない性分である。
自分でも判っているが、どうすることもできない。。
依頼を断ることが出来ない体質なのである。

一体、何処の誰が私を紹介したのか・・・嫌がらせとしか思えない。
不機嫌になりながらも、私は、依頼人が勝てる方法を考えていた。

いろいろ調べているうちに、気付くとメックのホームページを開いていた。
そのホームページには、企業専属の弁護士の名前が書いてあった。
業界では有名人と言われる凄腕の弁護士達の名前が幾つも書いてある。。

私は、完全にあきらめて、依頼人にあきらめさせる理由を考えていた。
と、その時、ある名前が飛び込んできた。

「富士原祐二」
私のよく知っている、人物だった。

彼とは、弁護士交流会の古い付き合いで、顔なじみだ。
何度か彼の知恵に助けられたこともあった。
彼に協力を頼めないだろうか？私は、小さな可能性に望みながら彼に電話をした。

彼は、私の話を真剣に聞いてくれた。
彼自身、正義感の強い弁護士であり、話のわかる人である事は知っていた。
彼は、考え込み躊躇したものの、。
企業の内部情報を調べる約束をしてくれた。。

ーー

○富士原祐二　編○

私は、彼の願いを聞き入れた。
私の雇い主を疑うことは、気が引けたが、彼には、大きな恩があったから・・・

そもそも私が弁護士業界で有名になれて成功者になったのは、彼の犠牲のお陰なのだ。
わたしは、彼に感謝しつも、ずっと罪悪感を感じていたのだ。

だが、調査の段階で、決定打となる証拠は何一つ無かった。

しかし、真実を知っているであろう、関係者にめぼしがついた。
その関係者は、この話題にひどく怯えているようだった。
私は、その関係者を呼び出して、内密に話を聞こうとした。

彼は何も教えてはくれなかった。
彼は嘘をついているのは明らかだった。
だが、彼は、答えない。
私は、しつこく問いかけた後、彼は一言だけ言った「殺される」と・・・
そう言って彼は、そそくさと去っていった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
○常雄右腕　編○

私は、後日、弁護士の富士原祐二から、その体験談を聞いた。
私は直感した。その企業の背後に暴力団が絡んでいることを・・・
企業が社員を脅迫する時、上司から部下へのパワーハラスメントは目立つ行為だ。
そんなことをすれば、他の社員が会社に疑惑を持ってしまう。
それを避ける為には、外から間接的に、脅迫しなればならない。
その脅迫のやり方も証拠が残ってはいけないし、プロの暴力団が関与している可能性がある。
ならば、その暴力団を潰すことが出来れば、証人の安全が確保される。
そのためには、まず、この暴力団を特定することからはじめなければなれない。
できれば、暴力団に脅迫を受けている関係者にコンタクトをとりたい。
私は富士原祐二に、その関係者の連絡先を教えてもらった。

富士原祐二は、この事件を降りるように説得してきた。

だけど、私は、降りるつもりなど無い。
なぜなら、私の本当の職業は弁護士ではない。
暴力団を潰すことが本職である。
弁護士をやっているのは、あくまで、人脈を探す為だけである。

親しい富士原祐二にも、この事実は内緒にしている。
もし、私の存在が明るみになれば、私は殺されるかもしれない。
場合によっては、私だけでなく富士原祐二にも危険が及ぶかもしれない。
闇の組織とは、それくらいは簡単にやってのけることを私は知っている。
だから、富士原祐二には、後々、「怖くなって諦めた」と嘘でもついておこうと思う。

すぐに、その関係者とコンタクトを取りたいところだが、、
普通にコンタクトをとってはいけない。
理由は、調査していることがバレてはいけないのだ。
もし、バレてしまうと、その関係者は暴力団に消されてしまう可能性あるのだ。

直接会えば、必ず、暴力団に見つかる。
関係者はいたるところで、監視され脅されていると考えなければならない。
もし、弁護士がコンタクトをとれば、尾行され私の情報もすぐにばれてしまう。

実は、既にバレているといっていい。
弁護士の富士原祐二が、関係者にコンタクトを取った時点で、彼は尾行される可能性が高く。
尾行された彼は、私とすでに会ってしまっている。
芋ずる式に私の存在が明るみになるのは、時間の問題と言っていい。

だが、ここまではいつものことだ。
私をいくら調べても何も出る事はない。
私の存在は、あくまで、離婚相談の弁護士だからだ。
今まで暴力団を沢山つぶしてきたが、
それは、すべて、記録としては残っていない。

なぜなら、私のやり方は、最初から最後まで、その存在を誰にもばれることがない。

このやり方は、比較的簡単である。

それは、インターネットの匿名性を利用するのだ。

私は出会い系のエロサイトを開設している。
このエロサイトには、2ショットのプライベートチャットコーナーを設けている。
ここを連絡手段に使うのだ。

これなら、普通の連絡手段の携帯電話やメールと比べて、身元が記録に残ることはない。
残るのは、エロサイトのアクセス記録だけである。
また、出会い系エロサイトなら頻繁にアクセスしても男のサガだと思われるから、暴力団の監視の目をかいくぐれる。

暴力団は、直接携帯を奪って成りすまして書き込ない事には、気付かつかない。
だけど、成りすますにも合言葉を決めてあるから、
よほどのことがないと、バレルことはない。
現に今まで、一度だってバレタことがないのだ。

私は、今回もこのやり方で、彼とコンタクトを取ったのである。
彼は、このやり方に安心してくれたのだろう。全てを教えてくれた。

読みどうり、企業側は暴力団と手を組んでいた。
暴力団を特定することができたので、次の段階に進むとしよう。

・
・
・

難しいのは、暴力団を特定した後である。
ここから先は、脅す側の人間になる。
法律なんて関係ない、問答無用の無法地帯。
私の存在がばれた時点で終わりなのである。
もう、エロサイトのような裏技的なシステムは使えない。

私は、今回も同じやり方で挑むのだが、正直あまり期待していない。
だけど、今のところ、他に良いやり方を知らない。
確実な方法が他にも、あるのだが、どれも危険が付きまとってしまい、命がいくつあっても足りない。

その良いやり方は・・・
私の存在を一切バラさないで、暴力団を解体して警察に捕まえさせることだ。

警察に捕まえさせて刑務所に入れる。

証人への脅迫が緩くなったところで、証人自らが、私以外の弁護士に依頼をして助かる。
こんなやり方になる。

「暴力団を解体して警察に捕まえさせる」
これが一番の難題だ。
これには、いつも悩まされる。幾ら考えても、今、以上に良いやり方は思いつかない。

なぜなら、間接的に誰かに調査させても、その人に危険およぶ。
その人が脅迫に屈服したら私の身元に繋がる
だから、ここからは、暴力団とは全く関係の無いところで事を起こさなければならない。

そのやり方の成功率は、５％に満たない。
殆どが、失敗に終わる可能性がある。
その代わり、私への安全が確保されている。

私は、今回も、この方法を実行した。
答えが出るのは、数ヶ月先になるだろう。

私がしたのは、小さな可能性をいじることだけだ。
私に出来るのはもうなにもない。
出来る事といえば、祈るくらいである。

神の加護があれば、沢山の人が救われるだろう。
私は、神を信じる訳ではないが、この時ばかりは、信じることにしている。
私は心の中で、奇跡が起きることを今日も願っていた・・・

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

○常雄右腕がとった行動　説明くさそう編○

「暴力団の悪い噂をながす」これだけである

暴力団は噂ごときではダメージにはならない。
だけど、それにより、町の住民たちの暴力団への見る目が変わる。

住民たちは、暴力団の行動に敏感になる。
そして、何らかの事件が住民に偶然的に起きた時、
住民たちが、暴力団に責任を求める可能性がある。

例えば、子供の家出、失踪。
違法風俗店に自分の子供が働いているのを気づいて激怒した親たち・・・
子供たちの麻薬に気が付く努力をして、結果的に麻薬を見つける親や先生・・・
それを元に行動を起こそうとする親、先生、教育団体・・・
等など・・

たとえそれらの事件が、その暴力団が関与していなくても、
噂をキッカケにして、町の住民が、暴力団の撲滅運動をすることがある。
そして、この撲滅運動に勇気をもった被害者があらわれ、被害を訴える。
その被害者が幸運にも被害の証拠を手に入れる可能性があり、

かつ、それが結果的に、その暴力団の仕業であることになれば、警察が動き出きだす。

そういった奇跡が連続して起こる時がある。
上手くいく時は、まるでドミノを倒すように自然に事が起こってしまう。

とにかく・・・そこまでくれば、暴力団は少なからずダメージを受ける。
でも、その殆どが、解体にまでは至らない。
暴力団が潰れる可能性は、５％程度。
とても低いが私は、これに賭けるしか方法がない。

私は、今回も、この方法を実行した。
答えが出るのは、数ヶ月先になるだろう。

私がしたのは、小さな可能性をいじることだけだ。
私に出来るのはもうなにもない。
出来る事といえば、祈るくらいである。

神の加護があれば、沢山の人が救われるだろう。
私は、神を信じる訳ではないが、この時ばかりは、信じることにしている。
私は心の中で、奇跡が起きることを今日も願っていた・・・

作者の独り言

常雄右腕が、なぜ、ああも極端なまで暴力団に身元がバレルのを恐れる様になったかと言うと、ある事件を彼が知っていたからです。それは先日放送された、ベストハウス１２３にあるらしい。

以下の記事は実際に暴力団に立ち向かった一人の記者の実話である・・・

～以下、番組ＷＥＢサイトからの引用～
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗｚ．ｆｕｊｉｔｖ．ｃｏ．ｊｐ／１２３／ｏａ．ｈｔｍｌ

２月２４日放送
ほっしゃん。　プレゼン

『ヴェロニカ・ゲリン』
～脅迫！暴行！銃撃！命がけでマフィアと戦った女性ジャーナリスト～

アイルランドの新聞社、「サンデー・インディペンデント」の、犯罪報道記者。入社、わずか９ヵ月で、９本ものスクープ記事をものにする。ヴェロニカが、最も心を痛めていたこと、それは、麻薬。１９９０年代、アイルランドの首都ダブリンでは、ヘロインが蔓延。背後でマフィアが麻薬を売りさばき、巨万の富を築いていた。マスコミも、警察も、マフィアの報復を恐れていたが、ヴェロニカは、見て見ぬふりなど出来なかった。強い思いの理由、それは、家族。夫・グレアムと、最愛の息子・カハル。彼女は、息子の為に、国の

未来を守りたかった。取材は想像以上に難しかったが、ヴェロニカは、一歩もひるまない。そして、一筋縄では行かない裏社会の男に、取り引きを持ちかけた。そして、彼女は、裏社会に独自の情報網を築いた。ヴェロニカは、麻薬の製造、密売から、武装強盗まで、マフィアの悪事を徹底的に暴き、記事にした。そして、高級乗馬クラブのオーナー、ジョン・ギリガンこそ、麻薬組織の黒幕に違いないと確信したヴェロニカ。取材は、確実に、ギリガンの足元に迫っていた。元会計士の目で、過去、何年にも渡り、金の流れや記録を徹底的に調べ、証拠を握ったヴェロニカは、再びギリガンの下を訪れる。ギリガンに暴行を受けながらも、ヴェロニカは、取材をやめなかった。彼女は、ジャーナリストとして、国を良くするため、その後も、マフィアを追い続けた。しかし、ある日、ヴェロニカは銃撃され、即死。享年３７。葬儀には、彼女の死を惜しむ、多くの人が駆けつけた。そして、彼女の死は、奇跡を起こす。市民が、麻薬撲滅に立ち上がったのだ。更に、アイルランド警察も、動いた。かつてない規模の一斉摘発で、１５０人以上もの、マフィアを逮捕。組織を壊滅状態に追い込む。ギリガンにも、禁固２８年が言い渡された。最愛の夫と息子に支えられ、敢然と、巨悪に挑み、国を変えた一人の女性。ヴェロニカ・ゲリンの名前は、今も、アイルランドで語り継がれている。

▲『ヴェロニカ・ゲリン』

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

彼女は結果的に殺されてしまうのですが、常雄には一つだけ疑問があったらしい。

それは彼女が死ぬことにより、大衆の正義感に火が着いてしまう現象をマフィア自身が予測できなかったことにある。

彼女『ヴェロニカ・ゲリン』が有名であった時点でマフィアの負

けは確定しているのも同然であり、彼女に手を出すのは自らの墓穴を掘る事になる・・・
だが実際に彼女は殺されてしまう。

この事について常雄氏いわく、別のマフィアが彼女を殺した可能性があるのだそうだ。
マフィア同士の抗争、縄張り争いに彼女が上手く利用されてしまったと言えるのである。
本来、暴力団というものは沢山の種類がある。例えば麻薬を売るA地区があるなら、暴力団Aが支配していて、他の暴力団BはA地区の利権を獲得できない。しようものなら暴力団同士の武力の争いになるので互いが傷付く。

このルールをヴェロニカ・ゲリンの事例に当てはめると、彼女が死ぬ事により、一つの暴力団が潰れる事になり、別の暴力団にとって利益になってしまう。別の暴力団にとっては新たな地区で活動できるチャンスが生まれる。
即ち、彼女とは全く縁の関係の無い暴力団が彼女を殺してしまうという事。
暴力団を一つ敵に回す事は、同時に他の全ての暴力団も敵になるのである。

という訳で・・・常雄右腕さんは暴力団に対して身元がバレルのを過敏に恐れているらしい・・・

おわり

私は今日も暴力団組織をつぶす為の仕事をしていた。
その帰り道、偶然、出会った。
私が捜し求めていたあの彼女に・・・
だが彼女は、私の事が判らなかった。
唯の似た人の様であり、私は、そのまま帰ろうとした―――その時
彼女に引き止められた。

「貴方・・・もしかして弁護士さん？」

「いかにも・・・なにかお困りで？」

つい聞いてしまった。仕事は今、手が一杯で余裕が無いのだが・・・
困った人をほおって置けないこの性分、なんとかならんかなトホホ・
・・

彼女の話を聞くと、内容は近隣の騒音問題についてであった。
夜、暴走族が通りを走るそうで困っているらしい。

だが、この手のトラブルは弁護士の仕事というよりも警察の管轄である。
私は、それを説明して納得させ、その場を離れようとしたのだが・・・

彼女が後を着いて来る。

「まだ？　何か用ですか？」

彼女は、どもりながら答えた。

「常雄さん・・・

「私を彼女にして下さい！」

は？

全く意味が判らない。
これはなんだ？
そもそも私達は、今日、出会ったバカリだし・・・・
もしや逆ナンというモノであろうか？

だが、参った・・

私は、女には興味が無い。
私は、ゲイ・・・同姓愛者なのである――――

さて、どの様にして断ろうか・・・
今まで、何十人と女の告白を断ってきたが、今回のケースはレアだ。
こんな唐突に告白された事なんてないし、告白なんてされるのも久しぶりである。
どうしたらいいのか・・・困ったな・・・
もし、ストーカーだったら嫌だな・・・
前の様に勘違いで刺されるのは怖いし・・・

言おう！

今まで人に黙ってきたけど、今度こそ、自分が同性愛である事を告げよう。
きっと幻滅されると思うけど、初対面だからこそ、その方が、きっと互いに受け入れやすい筈だ。
「実は――――

彼女の顔が一瞬、引きつった気がした。
そりゃそうだ。
告白した相手がゲイと判ったら、そりゃあドン引きするわな・・・

だが・・・

彼女は屈しなかった。

それどころか「私、ＢＬ好きなんです」と言い出した・・・

私は、困り果てた。

全く意味が判らないので彼女に説明を求めた。

「実は、私、以前から常雄さんの事を知っているんです。私が常雄さんを知ったのは、１年前の異業種交流会の時です。常雄さんが、あのマイクソフトの案件を担当している時です。常雄さんは、周囲から注目の的となっていて、沢山の女性から声を掛けられていましたよね。だけど貴方は、全く女っ毛が無くて、女を避ける様にしていた・・・その時、私のＢＬ好きの直感が働いたのです。貴方は、ゲイなのではないかとね・・・それから貴方の事が妙に気になり始めましてね・・・気が付いたら、後を追いかけてみたり、ストーカーしてみたり・・・自分でもオカシナ事をしているのは自覚しています・・・けど、思いを止められなくて・・・」

私に彼女の切ない思いが感情に流れ込んできた。だけど思いには答えられないキッパリと断らなければ――――

だけど・・・

「叶わない恋だと自覚しております。だからこそ、こうしてここに

居るのです！　貴方に何も求めたりしません。だから側に置いてください。貴方の口からＢＬという真実が聞かされた瞬間に私の思いはより強く凝固なモノへとなったのです！」

「まってまってまって！！　気持ちは判ったからね・・・とりあえず落ち着こうよ・・・ね？」

「駄目です。そうやって私をあしらおうとしても無理です。なぜなら私は貴方の弱みを沢山持っている」

そう言って彼女が取り出して見せたのは、私と暴力団関係者の密告者と2ショットで映っている写真。そして依頼人の情報リスト。私の生活の写真モロモロでっあった。

私は・・・

彼女の要求を・・・・

呑むしかなかった

☆

気が付くと、彼女は私の事務所に入り浸る様になっていた・・・

だが思った程、実害は無かった。

彼女は自分の立場をわきまえていたし仕事の手伝いもしてくれて、
正直、私も助かっていた。

日が経つにつれて、私は彼女に心を許してしまったのかもしれない。
まさか、その事が原因で、あの惨劇は起ころうとはこの時点では、
私も彼女も、まだ予測できていなかったのである。

～後書き～
ここまで書いてなんですが、正直、どう話を繋げたら良いのか全く
判りません。
常雄右腕は漠然としたイメージのまま書いた様なもので、辻褄が合
っているのが奇跡の様なものです。
むしろ１話の段階で辻褄が合わないのですが・・・

とりあえず作者お手上げです。
Ψ（・Ｏ・）Ψ

でも、このまま半端で終わらせるのも嫌だし・・・
誰か何でも良いからアイデアをクレオｍ（＿＿）ｍ

常雄右腕の裁判に勝つ方法

世界一の億万長者、ビルゲイツを倒す為に考え出した常雄の計画とは恐喝である。

まず、常雄はありとあらゆる人脈を行使し、裁判に勝つためにアップロに裁判費用を支援してくれる企業を探した。
法律なんて一切か関係なく、世界の平等を願う者達を片っ端から集めた。
集める口実は比較的簡単で、法的に保護されないどんなアイデアもビジネスとして成立するなら最初に考えた人にこそ権利が存在するという物である。

現在、アイデアを自分の権利として主張したければ、特許出願という手法が取られる。
しかし、これは通常、権利取得にするのに３０万かかる。だかそれも最低ラインの値段で、権利を保持し続けたり、特許審査を潜り抜けるだけで、平均１００万はかかるもの。
中には、１０年も審査を繰り返し３００万以上投資ににもかかわらず、自分のアイデアが自分の権利にならないケースもある。
権利にならない判ると、資金のある大企業がそのアイデアを流用しビジネスして稼いでしまう。
稀なケースであるが、実際にアイデアを奪われて悔しい思いをした人間が世界に沢山いる。

一般庶民、アマチュア研究者、小規模企業にとっては、世の中で大きく成功するのは、資金面で大きなハンディキャップがある。
そこで、常雄はそういった者たちをアップルの支援者として集めだし、１億の資源を確保した。

その事をマイクロソフト側に伝え、永遠と裁判を起こし続けると合法的に脅迫をし続けた。
裁判活動により、いずれ、マイクロソフトの資金は尽きるだろうから、マイクロは負けを認めなければならない。
しかし、ビルゲイツは自分の金だけで１０兆円は保持している。会社側の運転資金だって沢山ある。裁判しても勝つ自身があり乗って来た。

そして常雄の罠に嵌った。
公に裁判が争われれば、弱者である庶民は一斉に常雄側とアップルに味方をする。
裁判を行えば行う程、裁判は公になり宣伝になり、支援者は１０万人を超え資金的規模は１００兆円を超える。
マイク側に裁判で勝つ見込み等０になりマイクロは諦めるという計画だった。

そして新たな特許権システムをマイク側に教え、その為の支援者になって貰い、小規模事業主全ての人が未来に希望を持って生きれるよう手伝いをして貰うのである。
そういった計画を遂行していた最中に常雄は刺されて夢を諦めたのだった。

常雄右腕の裁判に勝つ方法（後書き）

新たな特許権システムは僕の活動報告内に書き込まれている。

クレオの常雄右腕　大阪弁バージョン

わいの名は常雄右腕。
弁護士や。
わいは、依頼人の弁護に駈けずり回る日々を送っとったんやけど
そないなある日、わいは、いきなり刺されたんや。

刺したのは女やった。

訳がわからんかった。。
この女はどなたはんなのやろうか？
意識が飛びそうな中で聞こえた言葉は……たしか……、

「うちと一緒に死んで……」

気が付くとわいは、病院のベットの上におったんや。。
横には、さっきの女がいたのやけど、
女は、わいに必死で謝っとったちうわけや。
女子（おなご）の説明では、オノレを裏切った彼氏と間違えて刺してしもたのだそうや。

間違えた理由は、その彼氏とわいの顔がソックリやったかららしい。

わいは、困ったよ。困惑や。
その中で、一番の問題となるのは、仕事や。
傷は幸いにも浅く、ちーとの間入院すれば助かるらしいねんけど、

わいは、急ぎの仕事を沢山抱えとったんや。

わいは、小さな弁護士事務所を仲間と経営しとったんやけど
仲間は、経理担当や雑務ならこなせるが、わいの代役にはなりえへん。
このまんまでは、事務所の信用がガタ落ちになってしまうわ。

普通、弁護士(わいら)は、同業者とある程度のネットワークを持っていて、
オノレに何ぞ起きたときの為に、代役を作っとるもんで、わいも代役が居るから、頼むことになるのやけど、どエライ悔しかった。

事務所が失望されて、普通の仕事が奪われるなら、わいも許せたんやけど。
今回の仕事は普通の仕事やない。
わいたち事務所の未来が掛かっとった仕事やった。

この案件は、大企業の訴訟に関するもので、莫大な資金が動いとる。。
1回の弁護報酬も千万単位で動くのや。
こないな稀な案件、小規模事務所に転がり込んで来る事なんて、もう永遠にないかもしれへん。
この戦いを勝ち取れば、わいたちの事務所は、業界で一気に有名になれたかもしれん。。
このチャンスだけは、失いたくなかったちうわけや。

わいは、一年も賭けて、裁判を闘う準備をしとった。
あきらめる事なんて出来るはずがなかった。

わいは、女子(おなご)を責めた……

やけど、女子(おなご)に、責任は取れるはずもないしのう。
女子(おなご)は、わいがこないな重大な案件を抱えとるなんて知るよしも無いからや。
一般人が受けるであろう、損害を女子(おなご)は負担すればええだけ。

でも、女子(おなご)は、何とかして、罪を償おうとしてくれた。。
思えば、女子(おなご)も辛い思いをして、こないな事件を起こしてしもたちうわけや。、
女子(おなご)のひたむきな姿勢を見ることで、許したい気持ちになっとったのかもしれへん。

時は経ち、冷静になってきたわいは、あの重大な案件に踏ん切りがつき始めとったたから、気になったんや。

女子(おなご)は、変わらず、わいの銀行口座に、慰謝料を振り込んでくれるんや。
せやけど、その額は、一般人が受けるであろう慰謝料を遥かに超えた金額や。
慰謝料の契約時、女子(おなご)はわいの意志を尊重してくれて、譲歩してくれたのや。

せやけど、わいは、疑問に思った。
普通の人が払い続けられるような金額では無かったからや。

わいは、事件直後は、我を失って興奮状態やったから
や余裕がなく、女子(おなご)のことは、あまり知ろう余裕がなかった。
女子(おなご)は、一体、どこぞら、お金を捻出しとるのやろうか。

わいは、女子(おなご)の事が気になった。
間違った慰謝料を返す為も含めて、女子(おなご)に会うことにしたちうわ

けや。

女子(おなご)に連絡を取り付け、カフェで待ち合わせることになりよったちうわけや。

女子(おなご)は、躊躇しとったが、喜んでわいの金を受け取ってくれたちうわけや。

わいは、女子(おなご)の仕事について聞いてみたが、教えてはくれず、そそくさと、帰ってしもた

そしたら女子(おなご)は、オノレのハンドバックを忘れて帰っとった。

わいは、走って届けに行ったんやけど

追いかけた先で、女子(おなご)は風俗店に入っていったんや。

わいは、足が止まったしもうた。

わいの金を返すために、ここで働きだしたのだとしたら、わいは罪悪感を感じざる負えん。

きっと女子(おなご)も仕事の事、わいに、知られたくなかったのやろうね。

でも、もう働く必要は無い。

わいは、風俗店の受付人に、忘れ物を届けて帰ろうとした。

せやけど、なんか嫌な感覚があったちう感じか。

言葉では説明でけへん嫌な感覚や

わいは、この店について調べてみたんや

そしたら無許可営業の闇風俗店やと判った。。

わいは、気になって、女子(おなご)に連絡をしたのやけど、繋がらんかった。

わいの脳裏に嫌な光景が過(よ)ぎった。

わいが弁護士であるのは受付人に女子（おなご）の忘れ物を渡した際、弁護士バッチでばれていたのかもしれん。
だとしたら、闇風俗店は、もみ消そうとする。
女子（おなご）に連絡が付かないのは、女子（おなご）に危険が及んでいるかもしれんのや。

わいは、その風俗店に行てみたが、時既に遅かったちうわけや。
店にはどなたはんも居なくて、女子（おなご）の住まいは引き払われとった。
女子（おなご）は、完全に消息不明となっとったんや。

わいは、念の為、女子（おなご）の親御はんの連絡先を調べたが、女子（おなご）に家族は、おらんかった。身寄りがなかったんや。

だれからも、捜索願も出されん。
だれからも、助けるられることは無い。

わいは、この時、初めて闇の世界の卑劣さを知ったんや。
わいが助ける
奴らは、わいがぶっ潰す。
そう心に誓った。

わいはまず、弁護士仲間の人脈を使い　これまでのヤクザ関係の案件を徹底的に調べた。
わいの気持ちが通じたのか、警察関係者に、つながりのある弁護士が協力してくれたやけど、調べてると、奴ら違法風俗店は訴訟の警告を受ける段階で逃げとる事がわかったのや。
偽名を使いヤバクなりよった逃げよる。別の土地で、また偽名を使い風俗店を経営するんやけど、それと同じような手口で、全国を転々と移動しとったんや。

せやけど、奴らの正体、居場所やらなんやらは特定できんかった。
別のヤクザ達も同じような手口で違法風俗店を手を貸しとるみたいで、それが無数に存在するのや。どの風俗店が、どのヤクザと繋がりがあるのか、まるっきし判らん。。

仲間の話によると、
日本全国のあらゆる土地で、これと同じ犯罪が繰り返されとるのだそうや。、
警察も犯人を捕まえても捕まえても、違法風俗店の数が減りらん事に嫌毛がさしとるらしい。、

わいは、腹が立った。
奴らや組織もそうやけど、みなにも……
そこに通う客、そこに違法風俗店があるのに、周りの人間が気づかない無頓着さに腹が立ったんや。

せやけど、それは、オノレに対しての言い訳やった……
元はと言えば、わいが女子(おなご)を追い込んだ様なものなのや。
わいは、オノレ自身の無頓着さに腹を立てとったんやね。
、
せめて、女子(おなご)から、連絡さえあれば、助けられる希望はあった。
やけどわいの携帯が鳴ることは、いっぺんも無かった……
・
・
わいの生き方は、いつの間にか変わったとった。
企業相手の金儲けの主義の様な依頼は断るようになり、、
ヤクザ相手の訴訟に勤めとったちうわけや。。

わいは、ある日、ヤクザの悪事を調べとるうちに、刑務所にいる一人の囚人に話を聞いたんや。
その囚人は、わいの調べに簡単に応じてはくれんと、ふざけとったんやが
囚人は昔の女の話をぺらぺらと、話しとった。
その話の中に、失踪した女子(おなご)を連想させるワードがいくつも入っとった。。
確信を持ったのは、この囚人の顔を見たときなんやけど、丸刈りで、一見すると、判らなかったが、わいの顔にソックリやったのや。

囚人は、わいに言った。
「あの女は、あっしにぞっこんやったから、ええなりやったちうわけや。
紹介した風俗店であっしの為にしっかりと稼いでくれたんや。
ええヒモやったんやけど、一体どこに逃げたんやろうな。
惜しい事をしたなーーーーー」

女子(おなご)の苦しみが、わいの中に流れ込んだ。。
女子(おなご)は、最後まで、この腐りきった男を愛そうとしとった。。
無理やり働かされ、追い詰められ、心中まで図ろうとしたんやで。

殴ってやりたい。殺してやりたい。。
けど奴は、壁の向こう……
わいは怒りをこらえるのに必死やった。

その日から、わいは、オノレの顔が嫌いになりよったちうわけや。
鏡でオノレの顔を見ると、激しい憎悪にとりつかれ、気が変になりそうやったんやわ。

そないな時、テレビで、ある小説家を見たんや。

その小説家は、あるバレエティー番組で、話をしとったんやけど
その話の内容にわいは共感したんや。
その小説家は、わいと同じ信念の持ち主であり、わい以上に強い信念を持っとったちうわけや。
わいは、その小説家はんの虜になり、この忌まわしいオノレの顔を整形して、その小説家はんとソックリに作り変えたちうわけや。

ほんでのわいは、今以上に仕事を懸命にやった。
全部のヤクザを豚箱に送り、いつか、その女子(おなご)が助かる日が来るのを信じてな……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5793j/

バトル３回目！　小説を比較勝負します！！　同じ様なテーマ（シナリオ？）

2011年1月9日03時41分発行